

平安京左京四条一坊十二・十三町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京四条一坊十二・十三町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたびホテル建設に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

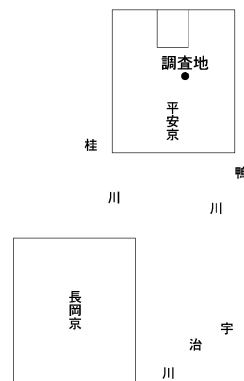
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安京左京四条一坊十二・十三町跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市中京区壬生坊城町 5-12 |
| 3 委 託 者 | 住友不動産株式会社 取締役社長 高島準司 |
| 4 調査期間 | 2007年2月1日～2007年3月20日 |
| 5 調査面積 | 315 m ² |
| 6 調査担当者 | 大立目 一 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた |
| 13 遺物番号 | 土器、瓦、漆器、木製品、金属製品、銭貨ごとに通し番号を付した。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 16 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 17 本書作成 | 大立目 一 |
| 18 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・近藤章子・櫻井みどり・山口 眞 |



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 構	4
(1) 基本層序	4
(2) 遺構の概要	4
(3) 第1面の遺構(室町時代後期以降)	4
(4) 第2面の遺構(室町時代後期-新期)	7
(5) 第2-2面の遺構(室町時代後期-古期)	12
(6) 第3面の遺構(平安時代以前)	14
3. 遺 物	19
(1) 遺物の概要	19
(2) 土器・陶磁器類	19
(3) 瓦類	23
(4) 漆器類	26
(5) その他の遺物	26
4. ま と め	30
5. 付章 出土漆器資料の材質・技法	33

図 版 目 次

図版1	遺構	1 第1面全景(北西から)
		2 第2面全景・SD115・SD119(南から)
図版2	遺構	1 SD155 南壁断面(北から)
		2 SD119(南から)
		3 SD119 南端部(北東から)
図版3	遺構	1 SK130(北東から)
		2 SK130(西上から)
図版4	遺構	1 第3面全景(南から)
		2 SX200・200B(南から)
		3 流路SD220 東西断断面(南東から)
図版5	遺物	SD115 出土土器
図版6	遺物	軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	周辺の調査（1：2,500）	2
図4	調査前全景（南から）	4
図5	調査風景（北から）	4
図6	第1面平面図（1：200）	6
図7	第2面平面図（1：200）	8
図8	北部東壁・北端北壁断面図（1：100）	9
図9	SD115 断面図（1：50）	9
図10	SK130 実測図（1：50）	11
図11	SD119 断面図（1：100）	12
図12	第2-2面平面図（1：200）	13
図13	SX200・200B 実測図（1：100）	15
図14	SD220 断面図（1：80）	15
図15	第3面平面図（1：200）	16
図16	西壁断面図（1：100）	17
図17	南壁断面図（1：50）	18
図18	SD115 第1層・2層出土土器実測図（1：4）	20
図19	SD115 第3層・落ち込み層出土土器実測図（1：4）	21
図20	SD130 出土土器実測図（1：4）	22
図21	SD119 出土土器実測図（1：4）	23
図22	軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・飾瓦拓影・実測図（1：4）	25
図23	SD115 出土漆器類実測図（1：4）	27
図24	その他の遺物拓影・実測図（1：2、1：4）	27
図25	瓦経	28
図26	火山灰ガラス（×40）	28
図27	SD220 採取自然遺物	29
図28	天文法華の乱頃の周辺地法華寺院配置図	30
図29	近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法	36
図30	漆塗り構造の分類	36
図31	代表的な樹種同定写真	37
図32	赤色系漆の蛍光X線分析結果（1：ベンガラ）	38

図 33 赤色系漆の蛍光X線分析結果（2：朱+ベンガラ）	38
図 34 漆塗り断面構造の観察（落射顕微鏡写真）	38

表 目 次

表 1 周辺の調査一覧表	3
表 2 遺構概要表	5
表 3 SD115 出土土器比率	19
表 4 SD119 出土土器比率	23
表 5 遺物概要表	28
表 6 SD220 採取自然遺物一覧表	29
表 7 SD115 出土漆器観察表	35
表 8 ろくろ挽き物の用材分類一覧表	36

付 表 目 次

付表 1 掲載土器一覧表	39
--------------------	----

平安京左京四条一坊十二・十三町跡

1. 調査経過

今回の調査はホテル計画に伴う発掘調査である。本調査に先立ち京都市文化財保護課が試掘調査を実施したところ、落込み・包含層など、中世の遺構が良好に遺存することが確認された。このため発掘調査の指導がなされた。調査は(財)京都市埋蔵文化財研究所が実施することとなった。

本調査は京都市文化財保護課の指導により、南北に細長い315㎡のトレンチを設定した。上部の近現代、江戸時代後期の面を重機で排除した結果、室町時代の整地層が良好に遺存していることを確認し、中世面から平安時代までの調査を第1から第3面にわたって行うこととした。さらに第2面は2時期(第2面・第2-2面)に分けて調査した。今回の調査の主要な遺構としては、第2から第2-2面に相当する室町時代後期中世遺構であり、これらには南北方向の堀跡・溝などがあげられる。室町時代後期以前の中世に属する遺構群は確認できていない。平安時代に属する遺構は、池状遺構の可能性のある湿地堆積を検出したにとどまり、明確な遺構は遺存していなかった。平安時代以前の遺構としては流路跡を検出した。

当調査地は、平安京では左京四条一坊十二町・十三町および櫛笥小路に該当する。十二町においては11世紀後半には菅原貞衡の邸宅があり、応保元年(1161)に焼失したことが文献(『山槐記』同年12月19日条)に記されている。十三町においては、12世紀前半には中納言藤原家成の邸宅が存在したと記述がある。(『仁和寺所蔵古図』¹⁾)

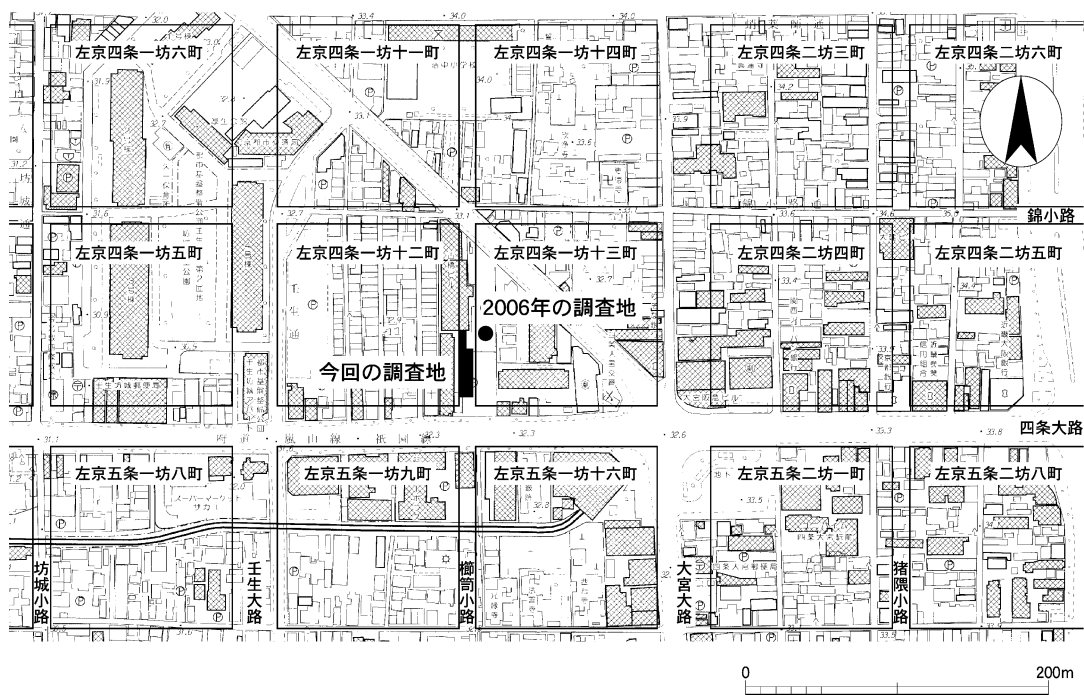


図1 調査位置図(1:5,000)

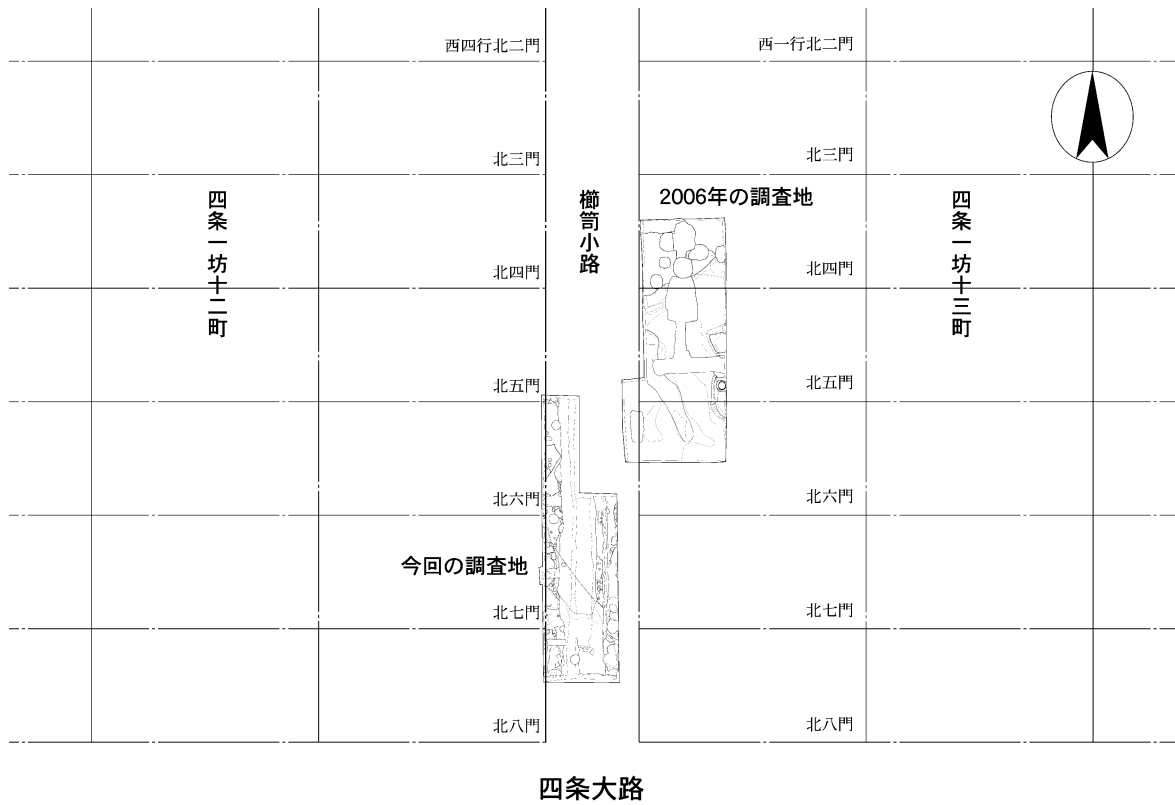


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

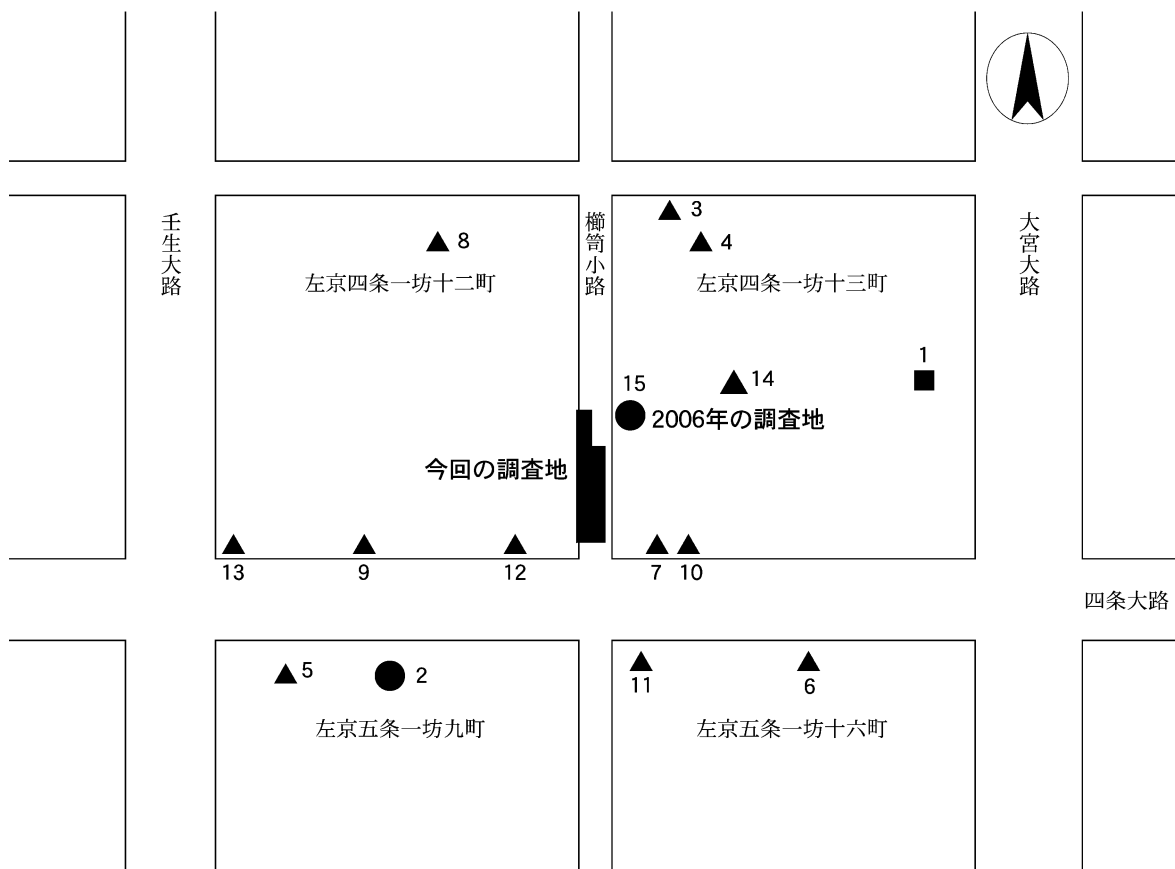


図3 周辺の調査 (1 : 2,500)

四條大宮周辺は、室町時代初頭頃から寺が建てられ始め、室町時代前期には、禪寺十刹に名を連ねる安国寺が、貞和二年（1346）に四條通に面して、四條大宮西側に造られたと記載されている²⁾。後には暦応四年（1341）に四條櫛笥に移転してきた妙顕寺、永和四年（1378）に妙顕寺より分派して建立された妙覚寺、応永年中（1394～1428）に四條大宮あたりに再建された妙蓮寺などの法華寺院が知られる³⁾。室町時代後期には、四條通の南側に城塞化された本隆寺・立本寺、北側に本能寺、四條通沿いに妙蓮寺・妙満寺・本禅寺などの法華寺院が密集した場所でもある⁴⁾。これらの寺院は市中の警護などで自治権を得るなどし、栄華を誇ったが、後に比叡山山門衆徒および南近江の守護六角氏等が起こした天文法華の乱により焼き打ちされることになるなど、戦国時代の動乱を経験した地域であった。

周辺で実施された主な調査成果は、2006年に調査地北東に隣接する四條一坊十三町内で発掘調査（表1-15）が行われ、平安時代の池状遺構、中世の井戸・溝・土壇、近世の土壇などを検出している。特に注目されるのは平安時代の池状遺構で、櫛笥小路西築地より以西にまで広がることが確認された。

調査地の南東、四條通に面した南側では1981年の調査（表1-2 左京五條一坊九町）で平安時代後期の井戸、室町時代の井戸・溝・堀・暗渠施設、江戸時代の柱穴列などを検出している。この調査での成果は中世の構と推定される遺構の検出である。

近隣の立会調査においては、平安時代後期から鎌倉・室町時代にかけての遺構、包含層、整地層流路堆積などが検出されており、特に中世の遺構の密度が濃い地域である。

表1 周辺の調査一覧表

No.	年度	遺跡名	調査法	主な遺構	文献
1	1980	左京四條一坊十三町	試掘	平安時代末の土壇、室町時代の土壇近世の土壇	
2	1981	左京五條一坊九町	発掘	平安時代後期の井戸、室町時代の溝、井戸、堀暗渠施設、江戸時代の柱穴	
3	1983	左京四條一坊十三町	立会	検出なし	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
4	1983	左京四條一坊十三町	立会	時期不明の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
5	1984	左京五條一坊九町	立会	攪乱	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
6	1984	左京五條一坊十六町	試掘	室町時代～江戸時代土壇	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年度
7	1987	左京四條一坊十三町	立会	平安時代後期・鎌倉時代・室町時代の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
8	1989	左京四條一坊十二町	立会	室町時代の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
9	1989	左京四條一坊十二町	立会	鎌倉時代・平安時代の包含層、平安時代の井戸	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
10	1989	左京四條一坊十三町	立会	近世の溝状遺構	『京都市内遺跡立会調査報告 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
11	1989	左京五條一坊十六町	立会	室町時代土壇	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
12	1990	左京四條一坊十二町	立会	流路堆積、時期不明の土壇	『京都市内遺跡立会調査報告 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
13	1996	左京四條一坊十二町	立会	平安時代末～鎌倉時代の土壇、平安時代～室町時代の溝	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
14	1997	左京四條一坊十三町	立会	平安時代後期の落込、鎌倉時代の整地層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
15	2006	左京四條一坊十三町	発掘	平安時代前期から後期の池状遺構、井戸、中世の井戸、土壇	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-10』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年

2. 遺 構

(1) 基本層序

調査地の基本層序は0.6～0.8 mの近現代盛土の下に、0.2～0.4 mの江戸時代後期の整地層である黒褐色砂泥、その下に第1面の遺構検出面となる灰黄褐色砂泥（第1層）が0.1～0.2 m堆積する。その直下が第2面・第2-2面の遺構検出面となる灰黄色砂泥・褐色砂泥（第2層）が0.4～0.5 m堆積する。いずれも室町時代の整地土層である。以下、第3面は暗灰色粘質土・灰オリーブ色の無遺物層、明褐色・黄褐色砂礫の地山となる。地山は北部から中央部で標高30.5 mである。中央部から緩やかに下がり、流路を検出した南端部で29.3 mとなる。堀（SD115）が埋められ、整地された面を第1面、堀が機能していた整地面を第2面、堀が掘られるより以前に該当する遺構面を第2-2面、平安時代を第3面に分けて調査を行った。

(2) 遺構の概要

今回の調査において、平安時代から江戸時代までの遺構を220基検出した。その種類は堀、土壇、溝、土取穴、Pitなどである（表1）。調査地が櫛笥小路内に当たるためか、遺構数は少なく宅地などに関連する井戸、廃棄土壇などは見られず、各時代を通して宅地としての環境でなかったことが考えられる。時代別にみると室町時代後期の遺構が多く、中世の他の時期の遺構は確認していない。平安時代においては、前期に属する池状遺構の可能性のある湿地状堆積以外は認められなかった。江戸時代も同様で遺存する遺構はごく少数で、土壇・整地土層の確認のみにとどまった。以下、主要な遺構について、第1面から順次時期を追って概述していく。

(3) 第1面の遺構（室町時代後期以降）（図6、図版1）

室町時代の整地面が調査区全体に広がり、北部寄りに0.15～0.2 mの高まりがある。調査区が櫛笥小路の中に位置することから、後述する堀を埋めた後、北部はさらに上部に土を均一に盛り上げ、整地されたと考えられる。遺構数は少なく、また江戸時代の遺構遺存数も非常に少なかった。この時期の遺構ではないが、東部の中央部から南端部に見られる杭列は、全て近現代のもので、



図4 調査前全景（南から）



図5 調査風景（北から）

路地があった頃の溝杭である。

SK 4 近世遺構として扱った江戸時代末期の土壙で、北部で検出した。平面形態は円形を呈する。規模は直径は 1.2 ～ 1.3 m、深さは 0.6 m を測る。埋土は暗灰色泥土が堆積し、遺構の壁際には木桶の据えられた痕跡が残る。19 世紀代中頃以降の国産陶磁器類が多く出土している。

SD32 調査区の西部北端で検出した溝状遺構である。南北 3.0 m、幅 0.5 ～ 0.8 m、深さ 0.15 m を測る。埋土は拳大の礫を含む黄褐色砂泥が浅く堆積する。出土遺物は土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦などがあり混入品が多い。

SD40 SD32 から約 12 m 南に下がった西部中央で、SD32 と軸を同じくする SD40 がある。南北 3.3 m、幅 0.5 ～ 0.8 m、深さ 0.15 m を測る。埋土は暗灰黄色砂泥である。出土遺物は土師器、瓦器、輸入陶磁器、国産施釉陶器、焼締陶器、瓦、壁土などがあり、室町時代後期に属する。

SK38 西端中北部で検出した土壙である。不定形な楕円形を呈し、南北約 0.8 m、東西約 0.7 m 以上で調査区外の西に延び、深さは 0.1 m を測る。灰黄褐色砂泥の埋土には拳大の礫を含む。出土遺物は土師器、瓦器があるが、ごく少量である。

SK52 南部で検出した溝状土壙である。東に傾き、南北 0.15 m、幅 0.3 m、深さ約 0.1 m を測る。埋土は灰黄褐色砂泥に焼土を含む。出土遺物には土師器、焼締陶器、焼瓦があり、焼瓦小片が多く出土している。室町時代後期に属する。

SK53 SK52 の南に並ぶ溝状土壙である。平面形態は鈎状を呈し、南北約 1.8 m、幅 0.25 ～ 0.3

表 2 遺構概要表

調査面	時代	主な遺構	概要
第 1 面	江戸時代末期	SK 4	木桶の水溜痕跡あり
	室町時代後期以降	SD32	南北に延びる溝状遺構、拳大の礫が含まれる
		SD40	SD32と軸が同じ
		SK52・53	溝状土壙、中世焼瓦片を多量に含む
第 2 面	室町時代後期 (新期)	SD115	南北堀
		Pit149・150・156・97・154	SD115に附随する南北Pit群
		Pit118・116	SD115に附随する南北Pit
		SK130	SD115に附随する施設遺構か
		Pit127	SK130に附随するPitか
		SK24	土取穴か
		SK16	土取穴か
SD119	SD115の東の南北溝 (SD115より古期に相当)		
第 2 1 2 面	室町時代後期 (古期)	SK139・140・143	北端部の土壙
		SK145	土取穴か
		SK163	土取穴か
		SK197	土壙
		SK211	土取穴か
		SK167	土壙
		SK209	土壙
第 3 面	平安時代前期	SX200・200B	湿地状堆積、池状遺構の可能性あり
	平安時代以前	SD220	SD115に削平される流路、火山灰堆積を確認

推定櫛笥小路西築地心

Y=-23,052

Y=-23,048

推定櫛笥小路東築地心



X=-110,448

X=-110,456

X=-110,464

X=-110,472

X=-110,480

Y=-23,044

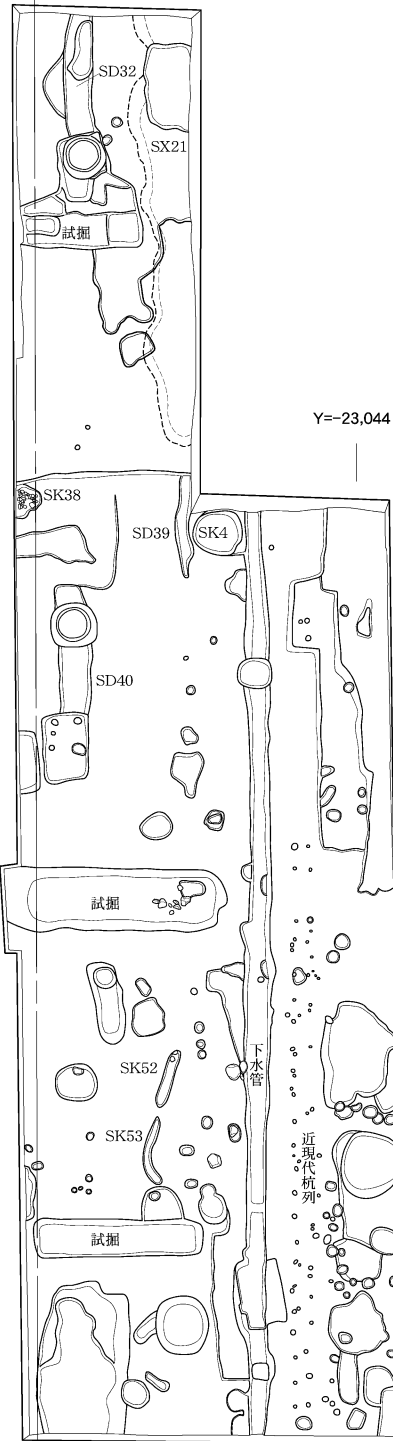


図6 第1面平面図(1:200)

m、深さ 0.1 m を測る。埋土は黒褐色砂泥で、出土遺物には土師器、焼締陶器が少量あり、焼瓦小片が多く含まれる。室町時代後期に属する。

(4) 第 2 面の遺構 (室町時代後期 - 新期) (図 7、図版 1 ~ 3)

第 2 面は南北に堀 SD115 を検出した面である。室町時代の北部の整地土層、焼土層 (SX21) を掘り下げ、中央部から南部にかけては、明確に遺構確認ができないことから約 0.1 m 掘り下げからの遺構検出となった。また、堀に切られる西部の遺構群は、大半が堀を開削する際に、整地した土層下で検出され、堀より古期に属する遺構と考え、第 2 - 2 面遺構として扱った。

SD115 (図 8・9) 調査区の中央部西寄りで南北に検出した堀である。南北ともに調査区外に延びる。断面形態は幅広の U 字状で、南北 38 m 以上、幅 4.8 ~ 5.3 m、深さ 0.9 ~ 1.3 m を測る。途切れがちではあるが、中央部が幅 1.4 ~ 2.0 m、深さ 0.3 ~ 0.7 m で落ち込み、二段落状を呈する。検出面の北端部の標高は 31.0 m、中央部 29.9 m、南端部が 29.9 m。底面の標高は北端部で 30.0 m、中央部 30.0 m、南端部が 29.5 m を測り、中央部付近から南へ下がる傾斜がある。埋土は大きく 3 層に分かれ、第 1 層は灰黄褐色系の砂泥層、第 2 層は灰色・黒褐色系の泥土・粘土層、第 3 層・落ち込み層が細砂・シルトを含む、暗灰色・黒褐色系の泥土・粘土層となる。第 2 層以下には細砂が混じるなどの流水痕跡がうかがわれ、水堀であったことを確認できた。堀の東西断面からは、堀を埋める際には西から埋められ、北部の南北断面からは、ほぼ平行に埋められた堀であったことを確認した。また、この堀の平安京条坊における位置は、十二町東限築地心より東に約 4.5 m で堀心に至る。このことから堀は、条坊を踏襲しながら、櫛笥小路中央西より付近を南北に成立していたことが確認できた。出土土器は 15 世紀前葉の遺物が土師器を多数出土し、他には瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、木製品、石製品、金属製品などがある。第 3 層・落ち込み層出土の土師器皿は、この時期の一括遺物となりうるものである。室町時代後期に属する。

南北 Pit 群 (149・150・156・97・154) 中央北部において、堀西肩で検出した。Pit149 は北端にある。南に Pit150・156・97 が 0.5 ~ 0.6 m 間隔で続き、約 2.0 m 離れて Pit154 が南端に位置する。平面形態は円形を呈し、小規模である。規模は不揃いで、径 0.2 ~ 0.46 m、深さ 0.14 m 前後。堀の肩部に位置することから、堀に附随する杭列などが考えられる。径の最も小さい Pit156 からは、室町時代後期に属する土師器、瓦器、国産施釉陶器などが少量出土している。他からの出土はない。

Pit118 堀の中央部西肩部で検出した。平面形態は円形で、径 0.6 m、深さ 0.1 m で、埋土は暗灰黄色砂泥が堆積する。堀の肩から底面は約 0.5 m と深くなる。Pit は堀に関連する遺構と推測される。

Pit116 Pit118 の南 0.7 m に位置し、堀の西肩下端で検出した。平面形態は円形で、径 0.5 m、深さ 0.5 m。埋土はオリーブ黄色泥砂が深く堆積する。検出面は堀の二段落ちになる手前に位置しており、堀に関連する遺構である。出土遺物は土師器皿が出土しており、室町時代後期に属する。

SK84 中央部南の SD115 西肩で検出した。平面形態は南北に長軸を有する長円形。東半部は

推定櫛笥小路西築地心

Y=-23,052

Y=-23,048

推定櫛笥小路東築地心



X=-110,448

X=-110,456

X=-110,464

X=-110,472

X=-110,480

Y=-23,044

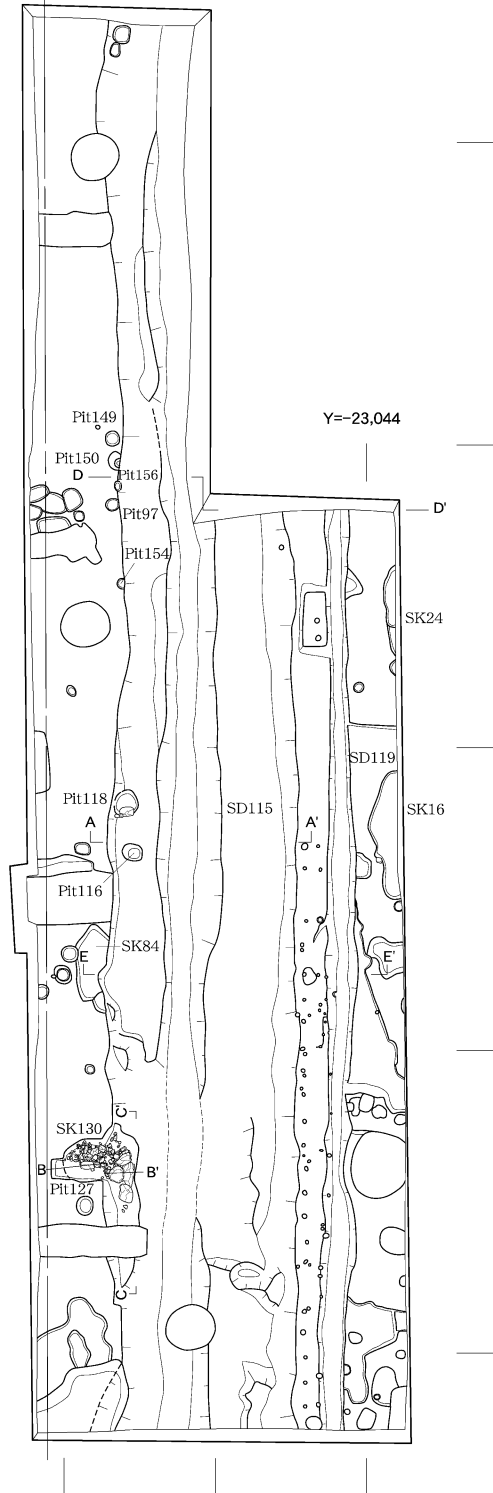
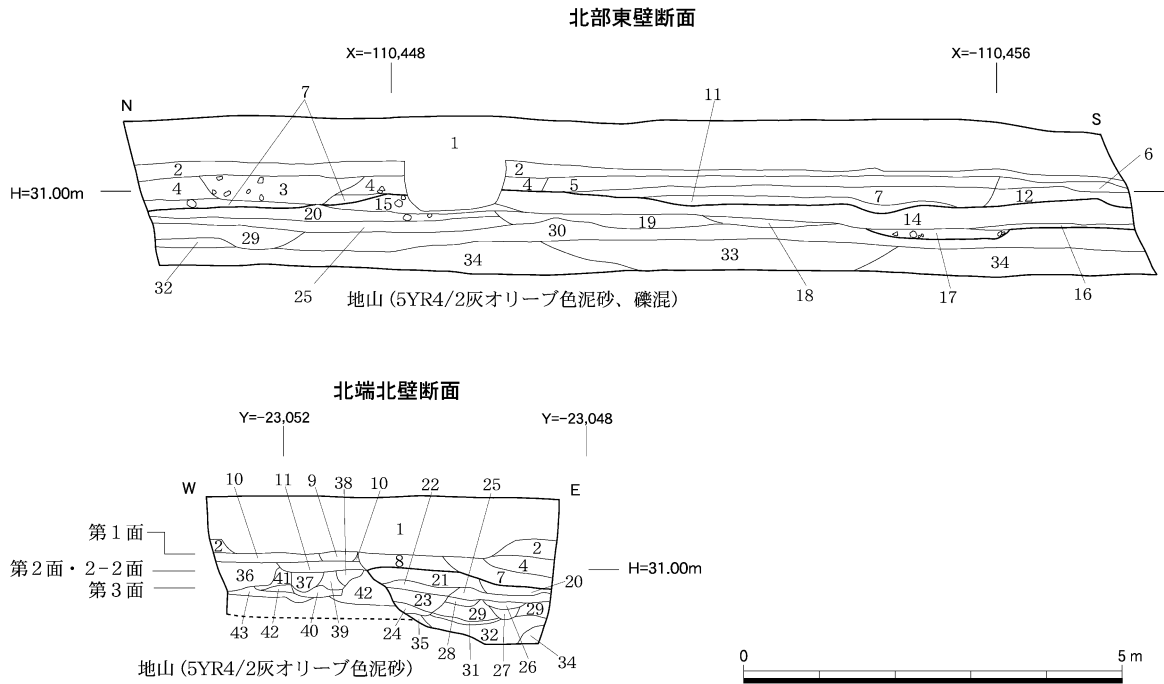


図7 第2面平面図 (1:200)



- 1 近現代盛土
 - 2 2.5Y3/1黒褐色砂泥 (江戸整地層)
 - 3 10YR3/3暗褐色砂泥 (江戸時代土壌)
 - 4 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ0.2~8cm礫少量、炭・焼土・瓦片含む
 - 5 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 炭含む
 - 6 10YR4/3灰黄褐色砂泥、炭少量含む
 - 7 10YR4/2~3/2黒褐色砂泥 炭・焼土多量含む
 - 8 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ0.2~5cm礫少量、炭・焼土・土師器片少量含む
 - 9 10YR5/1褐灰色砂泥 小礫・土師器片・炭含む (SD32)
 - 10 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ1~2cm礫少量、炭・焼土・土師器片含む (室町時代整地層・第1層・第1面)
 - 11 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ0.5~4cm礫・炭・土師器片少量含む
 - 12 10YR3/2黒褐色砂泥
 - 13 2.5Y4/2暗灰黄砂泥 φ1~4cm礫少量、炭・焼土・土師器片含む
 - 14 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ0.2~8cm礫含む (第2層)
 - 15 2.5Y4/1黄灰色砂泥 (第2層)
 - 16 10YR4/1褐灰色シルト (第1層)
 - 17 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ1~10cm礫含む (第2層)
 - 18 2.5Y5/2暗灰黄色粘土 φ1~5cm礫・瓦少量含む (第2層)
 - 19 10YR4/2灰黄褐色砂泥、やや粘質 (第2層)
 - 20 10YR4/1~4/2灰黄褐色砂泥、やや粘質 (第1層)
 - 21 10YR4/2灰黄褐色砂泥、10YR5/4にぶい黄褐色砂泥ブロック混 (第1層)
 - 22 10YR5/2灰黄褐色砂泥
 - 23 2.5Y4/1~3/1黒褐色砂泥、粘質 炭・焼土微量混 (第2層)
 - 24 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、粘質、微砂・粗砂含む (第3層)
 - 25 10YR4/1~3/1黒褐色砂泥、粘質 焼土・土師器片わずかに含む (第1層)
 - 26 10YR3/1黒褐色粘土、粗砂混 瓦片1点含む (第2層)
 - 27 2.5Y3/1黒褐色粘土 植物痕あり (第2層)
 - 28 10YR3/2黒褐色粘土 (第2層)
 - 29 2.5Y3/1黒褐色粘土 (第2層)
 - 30 10YR3/1黒褐色粘土 φ1~3cm礫少量、動物遺体片・木片含む (第2層)
 - 31 2.5Y3/1黒褐色粘土、暗灰色混、粗砂多量含む (第2層)
 - 32 2.5Y3/1黒褐色粘土、暗灰色混、粗砂多量・φ0.2~8cm礫少量・動物遺体痕含む (第2層)
 - 33 10YR3/1黒褐色粘土 φ1~6cm礫・粗砂多量含む (第3層)
 - 34 10YR3/1黒褐色粘土 φ0.5~10cm礫・粗砂多量含む (第3層)
 - 35 2.5Y4/1~4/2黄灰色粘土 (第3層)
 - 36 10YR3/3暗褐色砂泥 φ0.5~6cm礫少量、炭・土師器片含む (SK139)
 - 37 10YR4/4褐色砂泥 φ1~3cm礫・土師片少量含む (SK140)
 - 38 10YR3/4暗褐色砂泥 φ1~5cm礫、土師器片含む (SK140)
 - 39 10YR4/2灰黄褐色砂泥、やや粘質 φ1~4cm礫・炭・土師器片微量含む (SK140)
 - 40 10YR4/1褐灰色粘質土 φ1~3cm礫微量含む (SK140)
 - 41 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ1~2cm礫・炭・土師器片微量含む
 - 42 10YR4/4褐色砂泥 (古期の整地土か)
 - 43 10YR4/4褐色砂泥、2.5Y4/1黄灰色粘質土混 炭含む
- 室町時代整地層・焼土層 (SX21)
- SD115

図8 北部東壁・北端北壁断面図 (1:100)

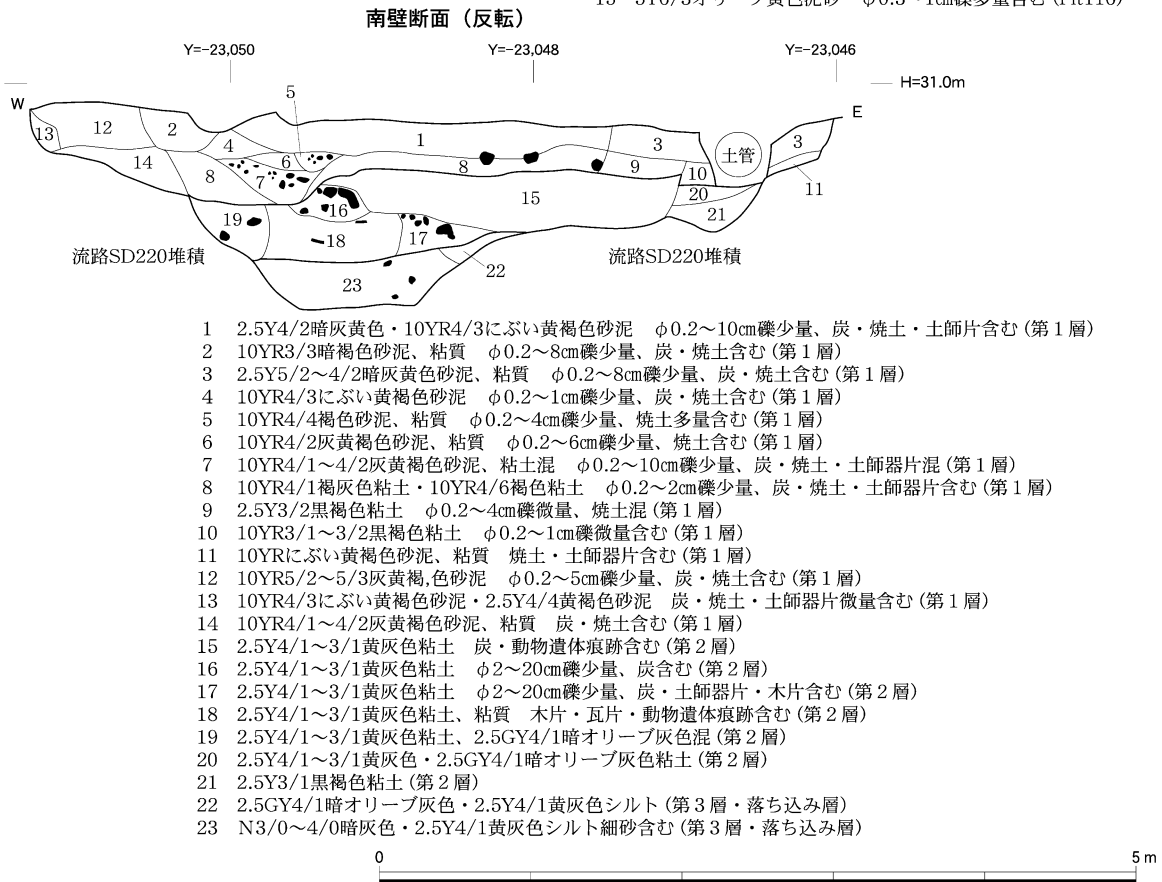
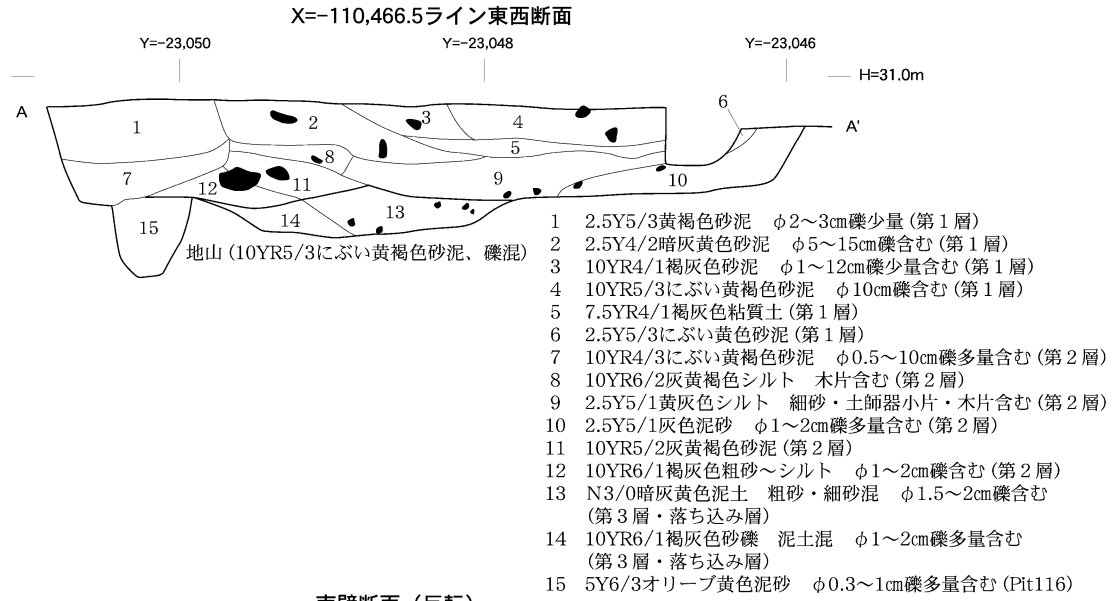
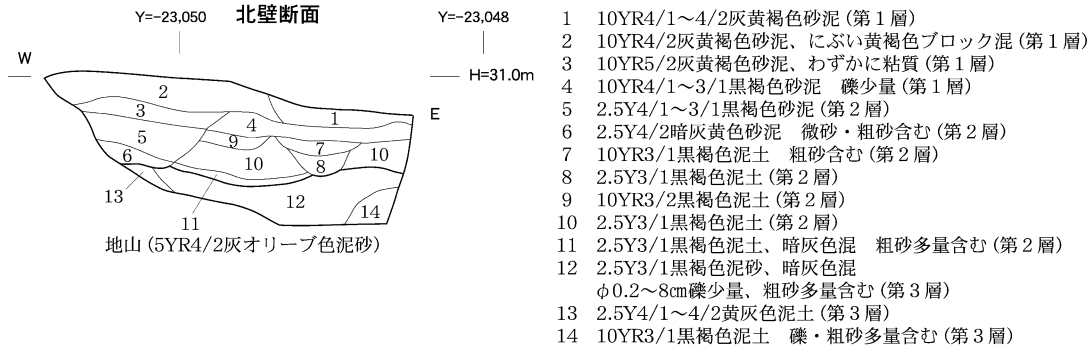


図9 SD115 断面図 (1:50)

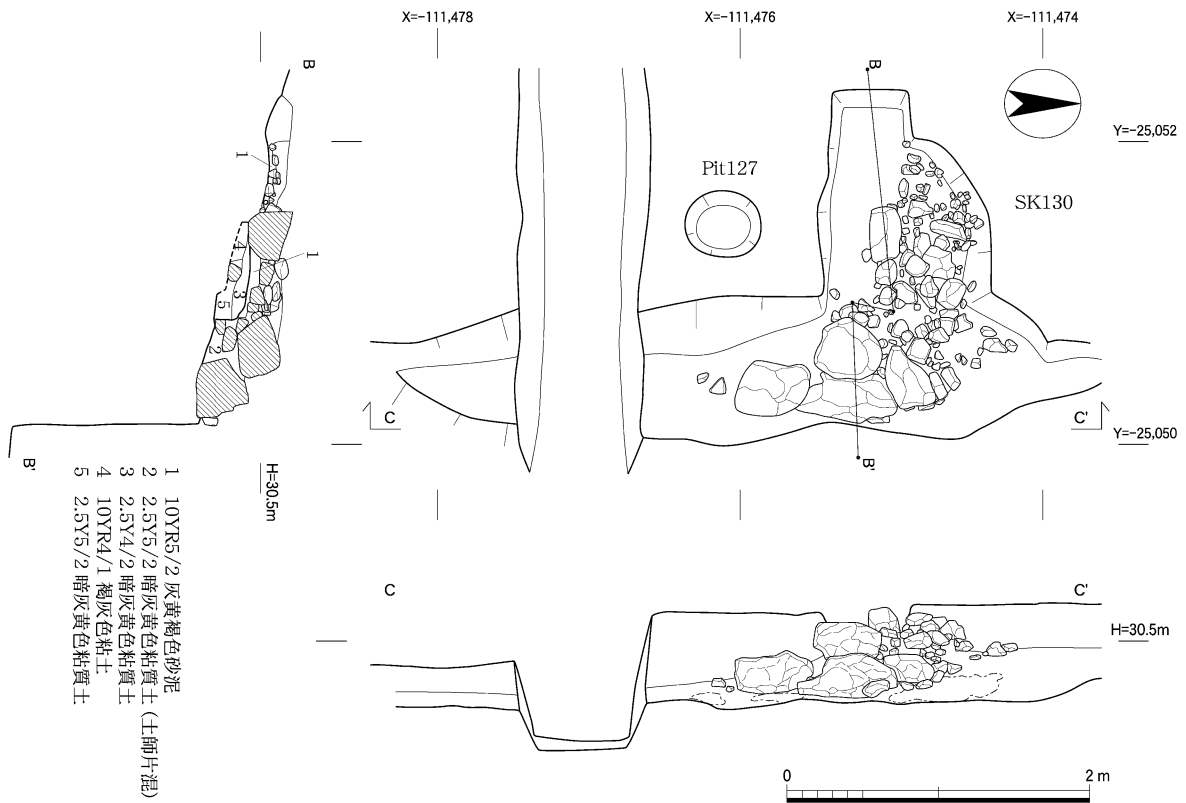


図10 SK130 実測図 (1 : 50)

SD115 に削平される。南北約 2.0 m、東西約 0.9 m、深さ 0.4 m を測る。埋土は暗灰黄色砂泥が堆積する。出土遺物は土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器が出土しており、室町時代後期に属する。

SK130 (図10) 南部のSD115 西肩部で検出した。平面形態は凸状で、堀に向かって広がり、底面は堀の肩まで段差をもって傾斜する。南北約 4.2 m、東西 2.0 m を測る。埋土は灰黄褐色砂泥が堆積する。凸部の西部北半には小礫が集中している。上部には落ち込んだと思われる径 0.1 ~ 0.35 m の礫が一部に載る。また、中央には長径 0.4 m の自然石が東西に据わり、裾部にも長径 0.6 ~ 0.4 m の自然石が南北に据えられる。これらは全体としてL字状を呈し、上段にも石が据え置かれたものと推測する。おそらく北端の石や径の大きな石は石組みから崩れ落ちたものであろう。以南にも裾の広がりが見られるが、石は遺存しない。また、堀対岸の東肩には同様の遺構は見られないが、東肩北の下端に長辺 1.5 m、幅 0.1 m の薄板が張り付いて残存していた。これは護岸のものとは認められず、SK130 との関連は不明である。堀に付随する施設の一部と推測されるが、詳細は明確ではない。出土遺物は土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などが出土しており、室町時代後期に属する。

Pit127 SK130 の南側で検出した。平面形態は円形で径 0.5 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は明褐色泥砂が堆積する。SK130 との関連は不明である。出土遺物は土師器、輸入陶磁器、瓦などが出土しており、室町時代後期に属する。

SK24 調査区の北東隅付近で検出した。平面形態は不定形で、埋土は灰黄褐色砂泥が堆積す

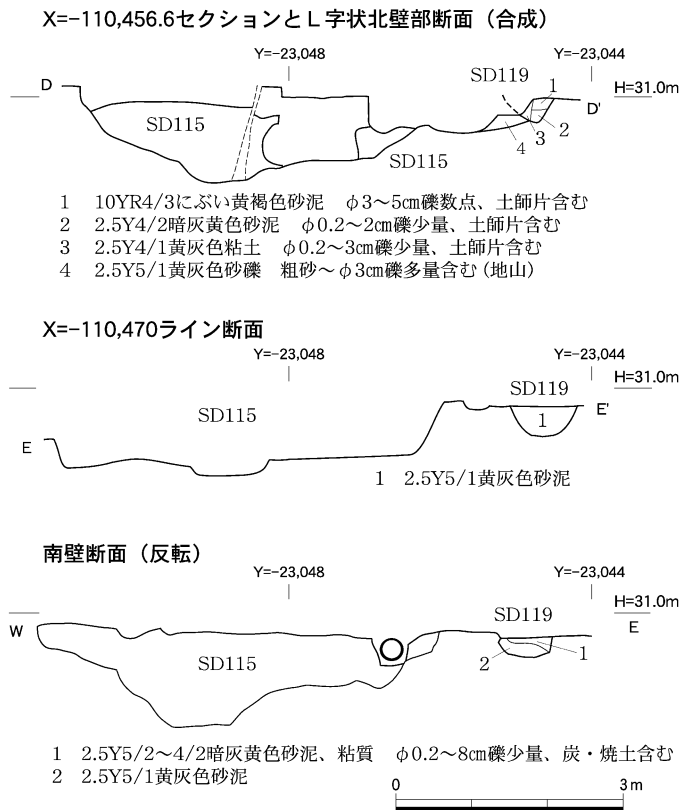


図 11 SD119 断面図（1：100）

時代後期に属するが少量である。

SD119（図 11）堀 SD115 の東に約 1 m の位置で、並行に南北に延びる。断面の形態は U 字状で、南北に 24 m 以上、幅が 0.5 ~ 0.8 m、深さ 0.25 ~ 0.4 m を測る。底面の標高は北端部で 30.6 m、中央部 30.4 m、南端部が 30.4 m を測る。中央から南に向かって傾斜する。埋土は黄灰色粘質土が堆積する。溝に付随する杭跡・護岸施設は検出していない。SD115 より出土遺物は古相に属し、堀が造られる以前の溝と考えられる。なお、SD115 とは検出面を同じくすることから第 2 面の遺構として扱った。出土遺物は土師器、瓦器、輸入陶磁器、国産施釉陶器、焼締陶器、瓦などがあり、室町時代後期に属する。

（5）第 2- 2 面の遺構（室町時代後期 - 古期）（図 12）

堀が成立する整地層の下層から検出した遺構を第 2- 2 面の遺構として扱った。前述した堀のためこの時期の遺構は東西に部分的に遺存しているが、明確な遺構として性格付けできるものは少なく、また不定形な形態を有する遺構が多いことから土取などの痕跡と考える。また、第 2 面で平面的に捉えきれなかった遺構もあり、第 2- 2 面検出となった遺構（SK139・140）もある。

SK139 北端部北西隅の高まりに位置する。形態は不定形で、北部、西部共に調査区外に広がる。規模は南北 0.3 m 以上、東西 1.0 m、深さ 0.4 m。出土遺物は土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦などがあるが少量である。

SK140 北端部で SK139 東に隣接して検出した。平面形態は円形状、規模は南北 0.4 m 以上、

東半部は調査区外となり、南北 3.0 m、幅は区外に広がり 0.3 m 以上、深さは 0.02 ~ 0.2 m を測る。北に向かって下がり気味で深くなる。土師器、瓦器、輸入陶磁器、瓦など SD119 と様相を同じくする遺物などがあり、室町時代後期に属するが少量である。

SK16 調査区中央の東端部で検出した。SK24 の約 1.5 m 南に位置する。平面形態は不定形で、東半部は調査区外となり、南北 3.4 m、幅は区外に広がり 0.7 m 以上、深さは 0.15 m を測る。埋土は黄褐色砂泥が堆積する。出土遺物は土師器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、石製品など SD119 と様相を同じくする遺物があり、室町

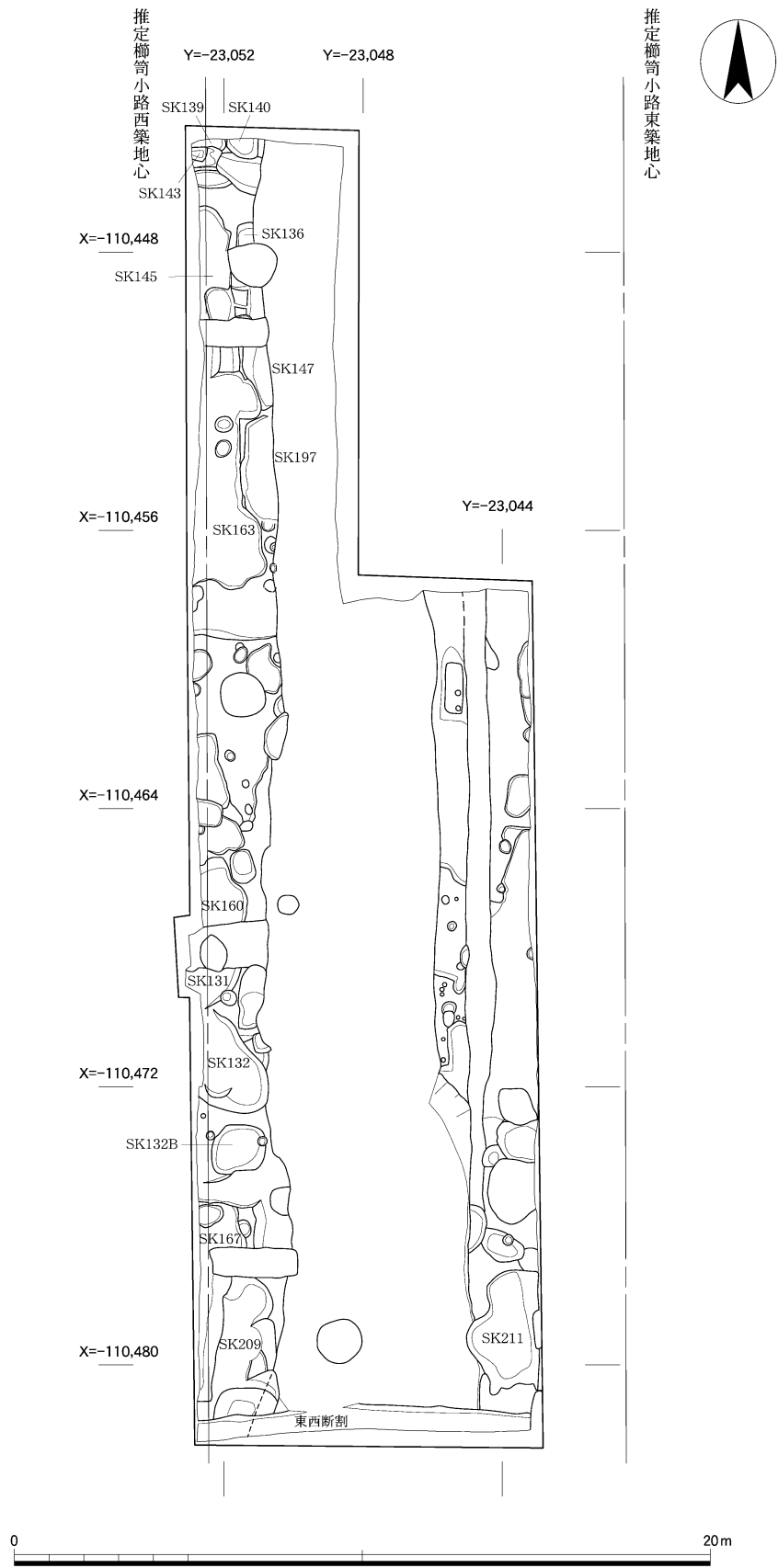


図12 第2-2面平面図(1:200)

東西 0.9 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は黒褐色砂泥が堆積する。出土遺物は須恵器、瓦器、輸入陶磁器がある。

SK143 北端部でSK139南に隣接して検出した。平面形態は方形状、規模は径 0.4 m以上で調査区外西へ広がる。深さ 0.5 mを測る。埋土は黒褐色砂泥が堆積する。出土遺物は検出していない。

SK145 北部西端で検出した。平面形態は不定形な南北方形状、規模は南北約 1.7 m、幅 0.5 m以上、深さ 0.2 mを測る。北肩部は調査区外西に広がる。埋土は灰黄褐色砂泥が堆積する。土取痕跡の可能性はある。出土遺物は土師器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土している。混入品もみられるが、主体をなすものは、室町時代後期に属する。堀の出土遺物よりも古相の遺物が多い。

SK163 北部西端に位置する。南北に約 3.0 m、幅 1.2 m以上、深さ 0.3～0.5 mを測る。西半部は調査区外西へ広がる。埋土は暗灰黄色砂泥粘質土が堆積する。平面形態が歪なことから土取痕跡の可能性があり、埋土は後の整地土層が入り込んだものと推測される。出土遺物は平安時代から鎌倉時代の混入品もみられるが、主体をなすものは室町時代後期に属する。堀の出土遺物よりも古相の遺物が多い。

SK197 北部SK163の東に隣接して、SD115に削平された形で検出した。平面形態は方形状、規模は 3.0 m、幅 0.8 m、深さ 0.1 mを測る。埋土は暗灰黄色砂泥が堆積する。出土遺物には土師器、瓦器が少量ある。この遺構と形態を同じくする遺構にSK136・147などがある。

SK167 調査区南西隅で検出した。第2面から遺存していたものである。平面形態は不定形な方形状、規模は南北約 2.8 m、幅 0.5 m以上で調査区外西に広がる。深さは 0.4～0.5 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土などを主体とするが整合堆積を示す。下層に流路が位置することから、整地面を安定させるために人為的に埋め戻され土壌か。出土遺物は土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。室町時代後期に属し、堀の出土遺物と同時期の遺物が多い。

SK209 調査区南西隅で検出した。SK167の東に位置する。平面形態は東肩が円形状に連続し、土取を受けたのか不定形な広がりを持つ。規模は南北 0.15 m、幅 0.5 mを測る。土師器、焼締陶器、瓦などが出土しており、室町時代後期に属する。

SK211 調査区の南東隅付近で検出した。平面形態は歪な凸状を呈する。規模は南北約 1.7 m、幅 0.75～0.1 mを測る。南半部は東肩を有するが、北半部は東に広がる様相がある。埋土は黒褐色粘質土・暗灰色粘質土が互層状態で入り込む。遺構周辺には黄灰色砂泥の良質な無遺物層が堆積し、土壌底面に地山礫層が露出しており、土取穴と考える。出土遺物は土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、滑石があり、室町時代後期に属し、堀の出土遺物よりも古相の遺物が多い。

(6) 第3面の遺構（平安時代以前）（図15、図版4）

室町時代の整地面を全て排除した地山面・無遺物層での遺構群である。室町時代以前の中世、平安時代中期・後期に相当する遺構群は検出できなかった。この面での主要遺構となったのは北端部で検出した、湿地状堆積遺構のSX200と平安時代以前の旧流路に相当するSD220に限られる。

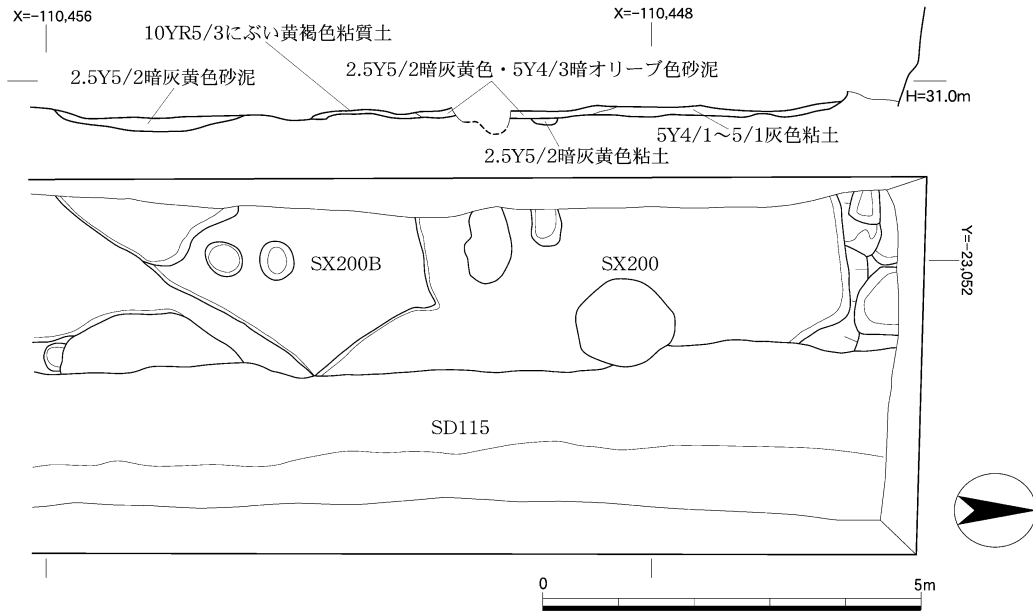
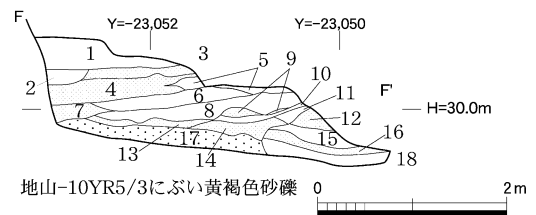


図13 SX200・200B 実測図 (1:100)

SX200 (図13) 北端部で検出した、湿地状堆積遺構である。東部はSD115に削平されている。形態は不定形なもので、湿地堆積は北肩から南に約5.0～6.5m広がり南肩に至る。深さ約0.15mと浅い。埋土は灰色粘土が全体に0.1～0.15mの厚さで堆積し、底面の標高は30.5m前後である。前述した北端部高まりに位置するSK139・140・143の南側が北肩を形成する可能性がある。出土遺物は平安時代前期の遺物が少量出土した。この遺構は2006年調査で検出された、池状遺構の南西延長部に該当するものと考えられるが、明確な判断はできていない。ただし底面標高は37.5m前後で、標高をほぼ同じくする遺構である。

SX200B (図13) SX200を南へ約4.8mの地区で砂礫層の落ちを検出した。SX200の南拡張部である。X=-110,456ラインから北東に約4.0m伸び、前述した湿地状堆積の南肩の西端部に接する。深さ約0.05mと浅い。埋土は暗灰黄色砂泥・にぶい黄褐色粘質土が浅く堆積する。

SD220 (図14) 平安時代以前の遺構としては流路SD220がある。流路の北肩部を調査区の中央部西端と南部東端で検出し、南肩の一部を南西隅断面で検出した。流路北肩の大半はSD115により削平されていたが、北西から南東方向の流れと、北東からの流れが南端部で合流する様相が観られる。埋土は炭化物を含んだ暗黄灰色粘質土・泥砂を主体とし、互層状に細砂、微砂層などが堆積する。南西部では暗黄灰色粘質土の直上に火山灰の堆積を確認した。出土遺物として榎木の流木片を採取した。



- | | | |
|----|-----------------|---------------|
| 1 | 2.5Y5/1黄灰色粘質土 | 砂泥・炭混 |
| 2 | 2.5Y3/1黒褐色粘質土 | 炭混 |
| 3 | 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 | 微砂・炭混 |
| 4 | 2.5Y4/1黄灰色微砂 | 炭混 |
| 5 | 2.5Y7/4浅黄色微砂 | 明確な火山灰堆積 |
| 6 | 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 | 褐色粗砂の互層 |
| 7 | 5Y4/2灰オリーブ細砂 | 2.5Y4/1粘質土・炭混 |
| 8 | 2.5Y4/1黄灰色粘質土 | 2.5Y4/1細砂・炭混 |
| 9 | 5BG3/1暗青灰色細砂 | 粘土・木片・炭混 |
| 10 | 2.5Y4/1黄灰色粘質土 | 細砂・炭混 |
| 11 | 7.5GY4/1暗緑灰色粘質土 | 粗砂混 |
| 12 | 5BG3/1暗青灰色微砂 | 炭混 |
| 13 | 2.5Y4/2暗灰黄色細砂 | 褐色細砂混 |
| 14 | 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂 | 粘土混 |
| 15 | 2.5Y4/1黄灰色粘質土 | 微砂・炭混 |
| 16 | 2.5Y5/1黄灰色微砂 | 炭・木片混 |
| 17 | 2.5Y5/4黄褐色砂礫 | 2.5Y5/2粘質土混 |
| 18 | 10G3/1暗緑灰色粘質土 | 微砂・炭・木片混 |

図14 SD220 断面図 (1:80)

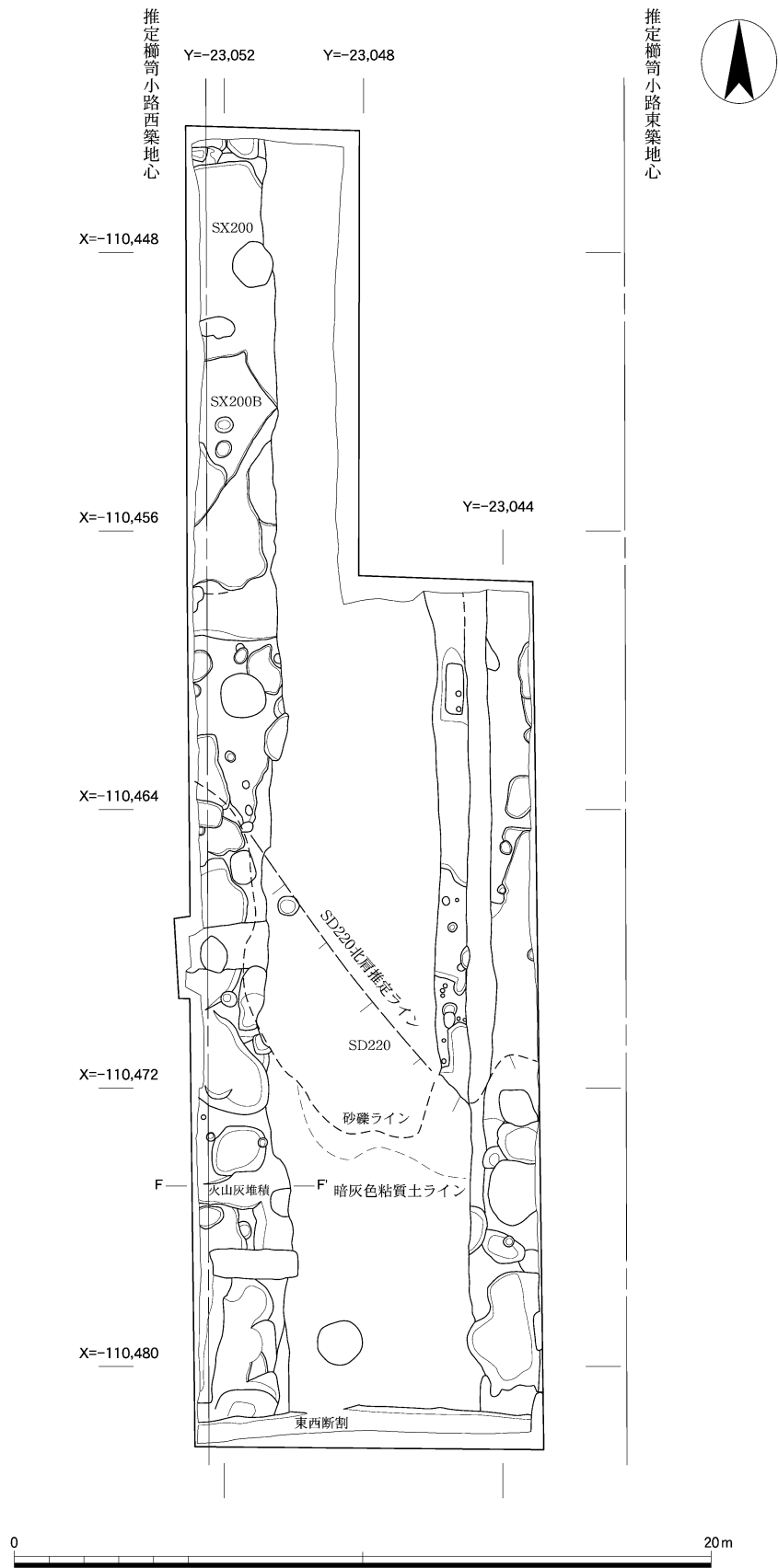
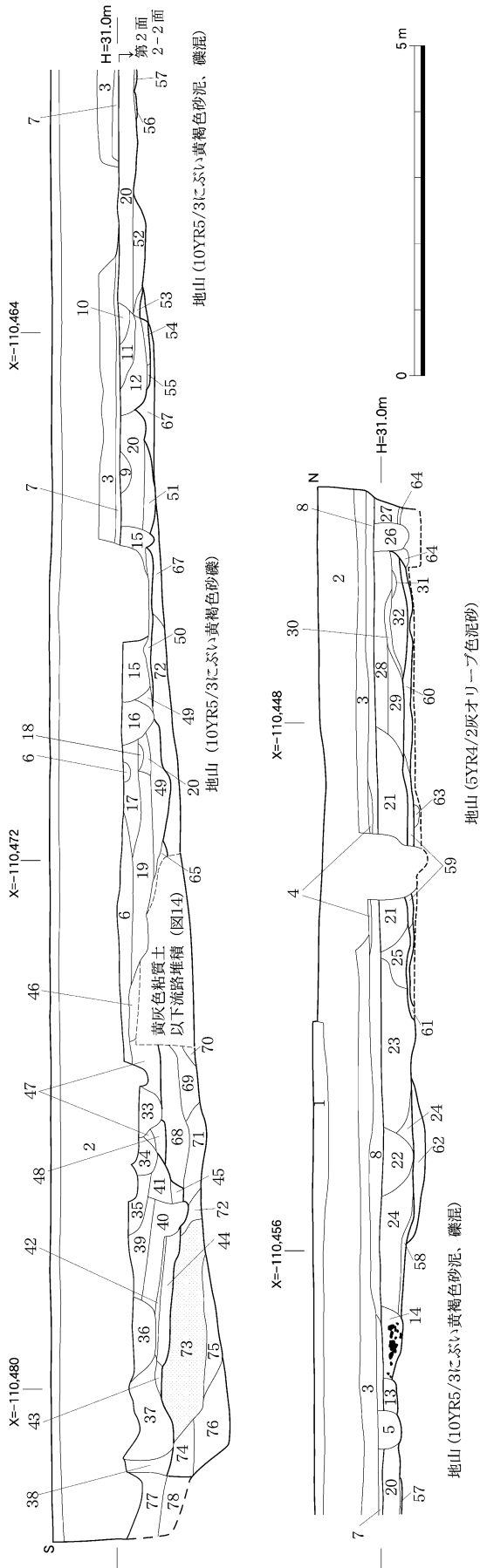


図15 第3面平面図 (1:200)



- | | | | |
|----|------------------------------------|----|-------------------------------------|
| 1 | アスファルト舗装 | 53 | 2.5Y5/2灰黄褐色粘質土 |
| 2 | 近現代盛り土 | 54 | 10YR4/2灰黄褐色砂泥 礫混 (SK170) |
| 3 | 2.5Y3/1黒褐色砂泥 (江戸時代整地層) | 55 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (Pt181) |
| 4 | 5Y3/1オリーブ黒色砂泥 | 56 | 2.5Y6/2暗黄褐色砂泥2 (Pt190) |
| 5 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 | 57 | 2.5Y3/2黒褐色砂泥 小礫含む (SK88) |
| 6 | 2.5Y4/1~5/1黄灰色砂泥 (室町時代整地層第1層上層) | 58 | 10YR4/2灰黄褐色粘質土 |
| 7 | 2.5Y4/1~5/1黄灰色砂泥 (室町時代整地層第1層第1面) | 59 | 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥・5Y4/3暗オリーブ色砂泥 (SX200) |
| 8 | 10YR4/2~4/3灰黄褐色 (室町時代整地層第1層第1面) | 60 | 5Y4/1~5/1灰粘土 (SX200) |
| 9 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 | 61 | 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土 (SX200B) |
| 10 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 (SK41) | 62 | 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 (SX200B) |
| 11 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥・5Y5/2灰オリーブ色細砂 (SK41) | 63 | 2.5Y5/2暗灰黄色粘土 |
| 12 | 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 (SK41) | 64 | 10YR4/4褐色砂泥 粘質土混 |
| 13 | 2.5Y4/2~5/2暗灰黄色砂泥 やや粘質 | 65 | 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土 |
| 14 | 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (SK38) | 66 | 2.5Y5/3黄褐色細砂 |
| 15 | 2.5Y4/2~5/2暗灰黄色砂泥 | 67 | 2.5Y5/2暗灰黄色シルト |
| 16 | 2.5Y4/2~5/2暗灰黄色砂泥 | 68 | 2.5Y3/1黒褐色粘質土 炭混 |
| 17 | 10YR5/2灰黄褐色砂泥 | 69 | 2.5Y4/1黄褐色微砂 |
| 18 | 2.5Y4/1黄灰色砂泥 (Pt168) | 70 | 5Y4/2 灰オリーブ細砂 2.5Y4/1粘質土・炭混 |
| 19 | 5Y4/1~5/1灰色砂泥 やや粘質 | 71 | 5Y4/2 灰オリーブ細砂 |
| 20 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 (SK163) | 72 | 2.5Y5/2暗灰黄色粘土 |
| 21 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 | 73 | 10YR5/4にぶい黄褐色細砂 |
| 22 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 | 74 | 10YR4/2灰黄褐色粘土 |
| 23 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 やや粘質 (SK163) | 75 | 5Y4/1灰粘土 |
| 24 | 10YR5/2灰黄褐色粘質土 (SK163) | 76 | 5Y4/1~3/1オリーブ黒色粘土 |
| 25 | 10YR4/2~5/2灰黄褐色砂泥 | 77 | 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 (地山) |
| 26 | 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (SK143) | 78 | 7.5YR4/2灰褐色砂泥 (地山) |
| 27 | 10YR3/3暗褐色砂泥 | | |
| 28 | 10YR3/3暗褐色砂泥 | | |
| 29 | 10YR4/2灰黄褐色砂泥 | | |
| 30 | 10YR4/4褐色砂泥 | | |
| 31 | 2.5Y3/2黒褐色砂泥 | | |
| 32 | 2.5Y5/1黄灰色砂泥 礫混 | | |
| 33 | 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 | | |
| 34 | 10YR5/2灰黄褐色砂泥 | | |
| 35 | 10YR4/2~5/2灰黄褐色砂泥 (SK167) | | |
| 36 | 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (SK167) | | |
| 37 | 10YR4/2~5/2灰黄褐色砂泥 | | |
| 38 | 10YR5/3にぶい黄褐色粘土 | | |
| 39 | 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 (SK167) | | |
| 40 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 (SK167) | | |
| 41 | 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土 (SK167) | | |
| 42 | 10YR5/2灰黄褐色砂泥 やや粘質 (SK167) | | |
| 43 | 10YR4/4褐色砂泥 (SK167) | | |
| 44 | 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 やや粘質 (SK167) | | |
| 45 | 10YR5/2灰黄褐色粘質土 (SK167) | | |
| 46 | 2.5Y 5/1黄灰色粘質土 | | |
| 47 | 2.5Y 5/1黄灰色粘質土 | | |
| 48 | 10YR4/1褐色粘土 | | |
| 49 | 10YR5/6黄褐色粘質土 (SK132) | | |
| 50 | 10YR5/6黄褐色粘質土 | | |
| 51 | 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (SK160) | | |
| 52 | 2.5Y6/3にぶい黄色砂泥 (SK165) | | |

図 16 西壁断面図 (1 : 100)

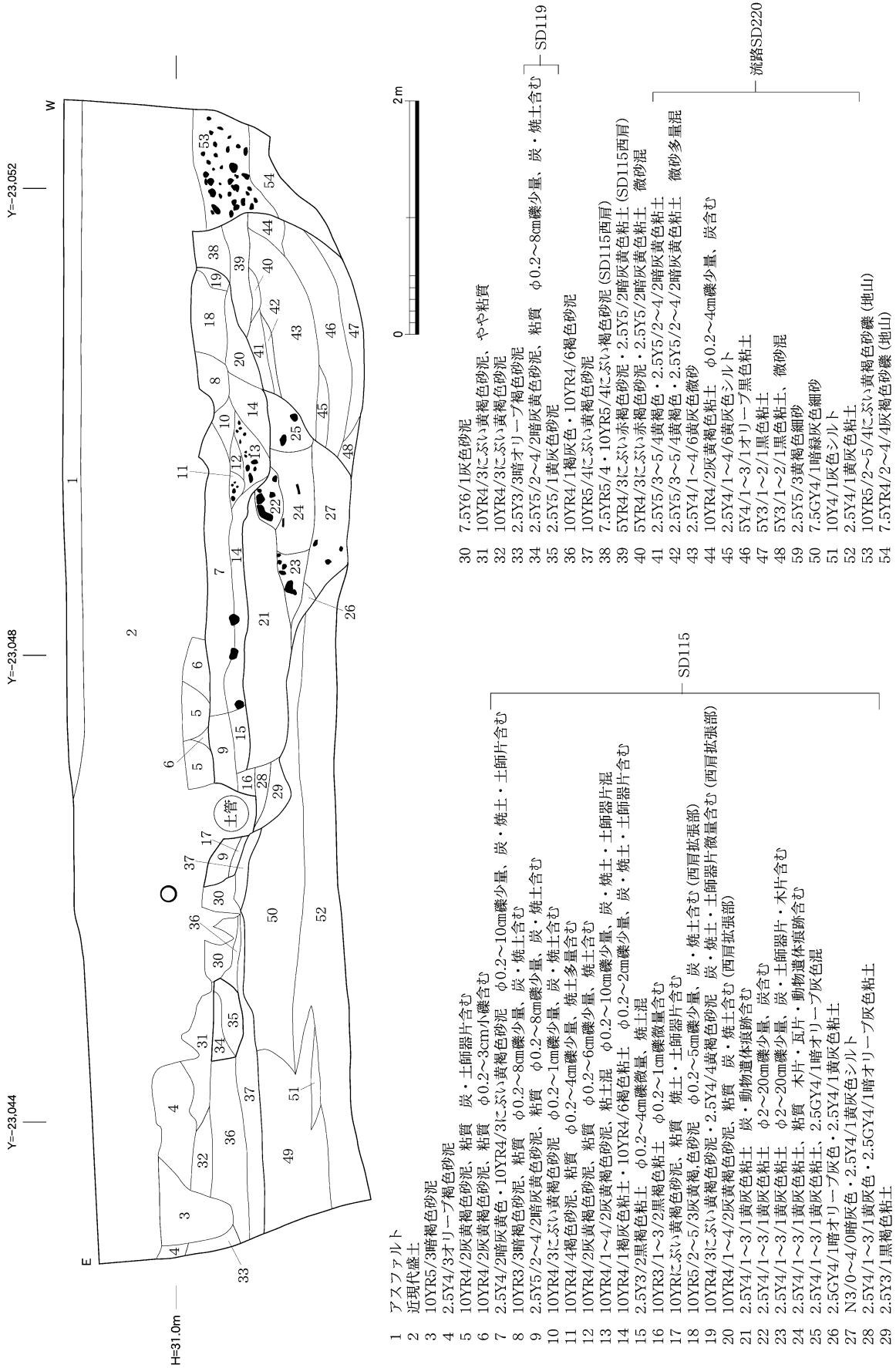


図 17 南壁断面図 (1 : 50)

3. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は平安時代から江戸時代中期にいたる時期の遺物が総計 78 箱出土した。内容は土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、漆器、木製品、銭貨、金属製品、石製品、土製品、人骨・動物の骨などである。大半は土器・陶磁器類で、以下これらの遺物について概説していく。なお遺物の時期は平安京・京都 I 期～期の編年案に準拠する。⁵⁾

(2) 土器・陶磁器類

土器類は土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器が多く出土している。その中で平安時代前期の土器類は少量で、SX200 の出土遺物に限られる。中期から後期にかけての土器類も非常に少なく、遺構に伴うものではない。平安時代末から鎌倉時代にかけての土器類は、室町時代後期の整地土層、堀、土壌などからの混入出土品である。その中には輸入白磁・青磁、須恵器が多く散見された。室町時代前期から中期にかかる遺物も非常に少なく、主体となったのは室町時代後期にかかる 16 世紀前後から以降の土器群となる。ここに掲載概説する SD115・SK130・SD119 の土器・陶磁器類は 16 世紀前後～16 世紀前葉の資料と考える。

SD115 出土土器 (図 18・19、図版 5、表 3、付表 1)

SD115 からは土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、輸入陶磁器、瓦、土製品、木製品、石製品などが出土している。出土土器の総破片数は 6,110 片あり、その内訳は土師器 83.8%、瓦器 8.5%、国産施釉陶器 0.9%、焼締陶器 5.4%、輸入陶磁器 1.4% である。なかでも土師器皿が他を圧倒して数量が多く、それに次いで鍋釜類の瓦器が続く。土師器皿は赤系の Nr、N、白系の Sh、Sb、S (大・中・小) に分類できる。土器年代は第 1 層・2 層が X 期中、第 3 層・落ち込み層が X 期古 (新相) に属する。以下、層ごとに分けて概説する。

第 1 層・2 層出土土器 (図 18) 土師器皿 Nr (1・2) は口径 6.1～6.5 cm。Sh (3～5) は口径 6.2～6.5 cm、やや大きい 6.9 cm のものもある。Sb (6～12) は口径 8.6～9.2 cm 前後で、立ち上がり直線的で、器高の高い 8 がある。S 小 (13・14) は口径 9.1 cm、S 中 (15～18) は口径 10.6～11.0 cm。S 大 (19・20) は口径 12.6～13.0 cm を測る。白系皿には器表色が灰白色、黄灰色のものも多く、

表 3 SD115 出土土器比率

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	碗・皿	5101	99.7%
	鉢・盤	0	0.0%
	甕・鍋・釜	15	0.3%
	その他	0	0.0%
	不明	2	0.0%
	小計	5118	100.0%
瓦器	碗・皿	0	0.0%
	鍋・釜	446	85.8%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	63	12.1%
	その他	8	1.5%
	不明	3	0.6%
	小計	520	100.0%
国産施釉陶器	碗・皿	36	66.7%
	壺・瓶	16	29.6%
	その他	2	3.7%
	不明	0	0.0%
	小計	54	100.0%
焼締陶器	壺	35	10.5%
	甕	202	60.7%
	播鉢・盤	87	26.1%
	その他	3	0.9%
	不明	6	1.8%
	小計	333	100.0%
輸入陶磁器	碗・皿	82	96.5%
	壺・瓶	1	1.2%
	その他	2	2.3%
	不明	0	0.0%
	小計	85	100.0%
他	他・不明	0	—
総数		6110	— 100.0%

また器厚の薄いものが見受けられる。手法は粗雑な作りのNr以外は、いずれも口縁部、内面はナデを施し、外面はオサエ。Sは底部内面にわずかな盛り上がり認められ、周縁が凹状圏線となる。

瓦器には香炉の大(22)・小(21)、鍋(23)がある。香炉はいずれも、三足の脚部を有する。大は渦巻き文を上下に3段に配する。鍋は蓋受けを有するもので、口縁部が屈曲する。内面に細かな刷毛目、外面は指圧痕が残る。

焼締陶器には丹波播鉢(24)、備前播鉢(25・26)がある。丹波播鉢は淡赤褐色の胎土で、信楽の胎土に似る。播目4～5本単位で放射状に巡る。備前播鉢は縁帯を有するもので、25は播目が7本単位で、9方向に放射状に巡る。

国産施釉陶器には瀬戸の灰釉皿(27)がある。内外面口縁部には灰釉が施される。

輸入陶磁器には白磁皿(28～30)がある。胎土は陶胎に近く、粗製品か。29は見込みに沈線が巡り、陰刻が一部見られる。30は顕微な胎土で器厚の薄い端反皿。

第3層・落ち込み層出土土器(図19)土師器皿Nr(31・32)は口径6.1～6.6cm。N小(33～36)は第1層・2層では見られなかったもので、口径6.6cmのもの、7.2～8.3cmのものがある。

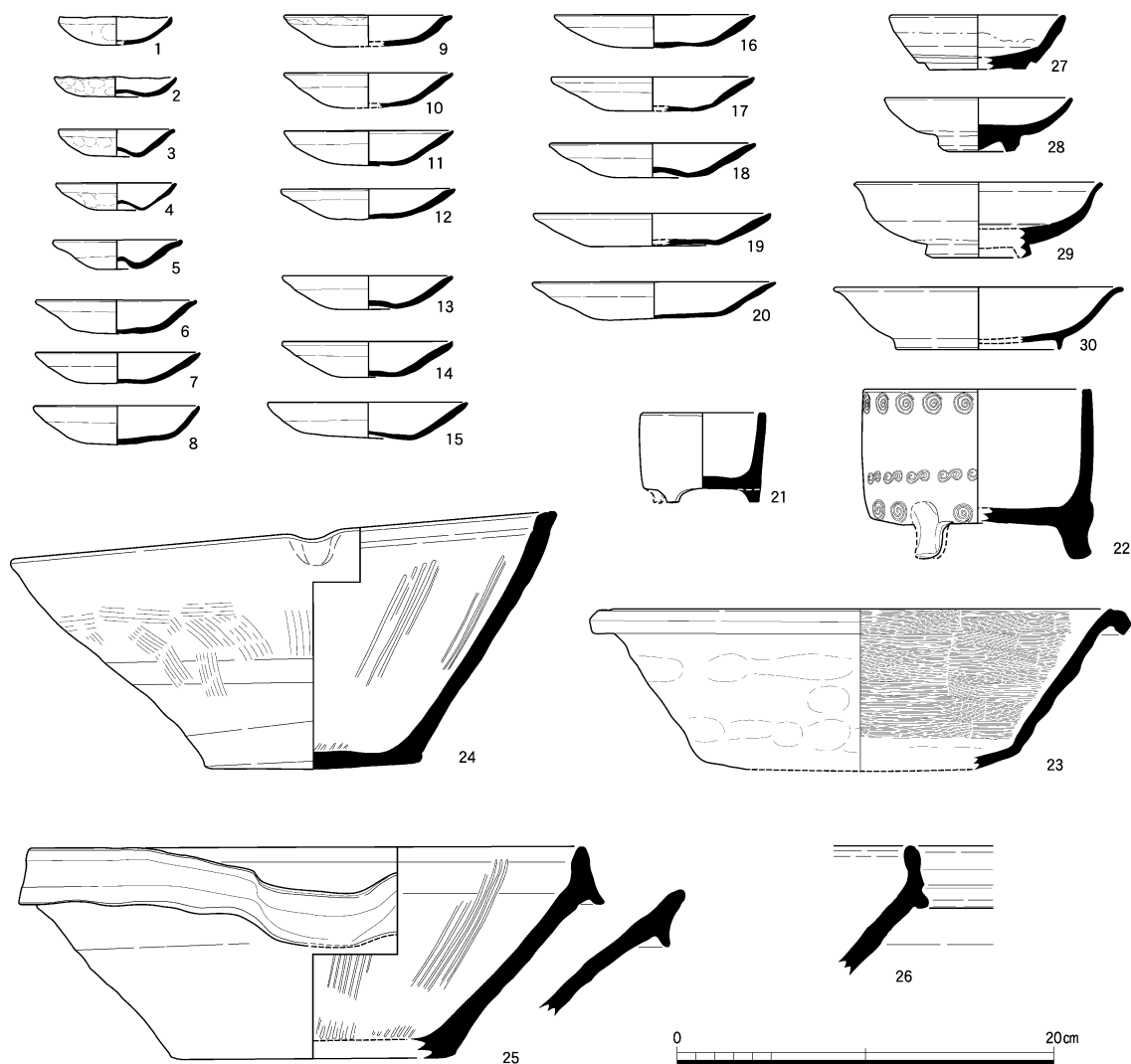


図18 SD115 第1層・2層出土土器実測図(1:4)

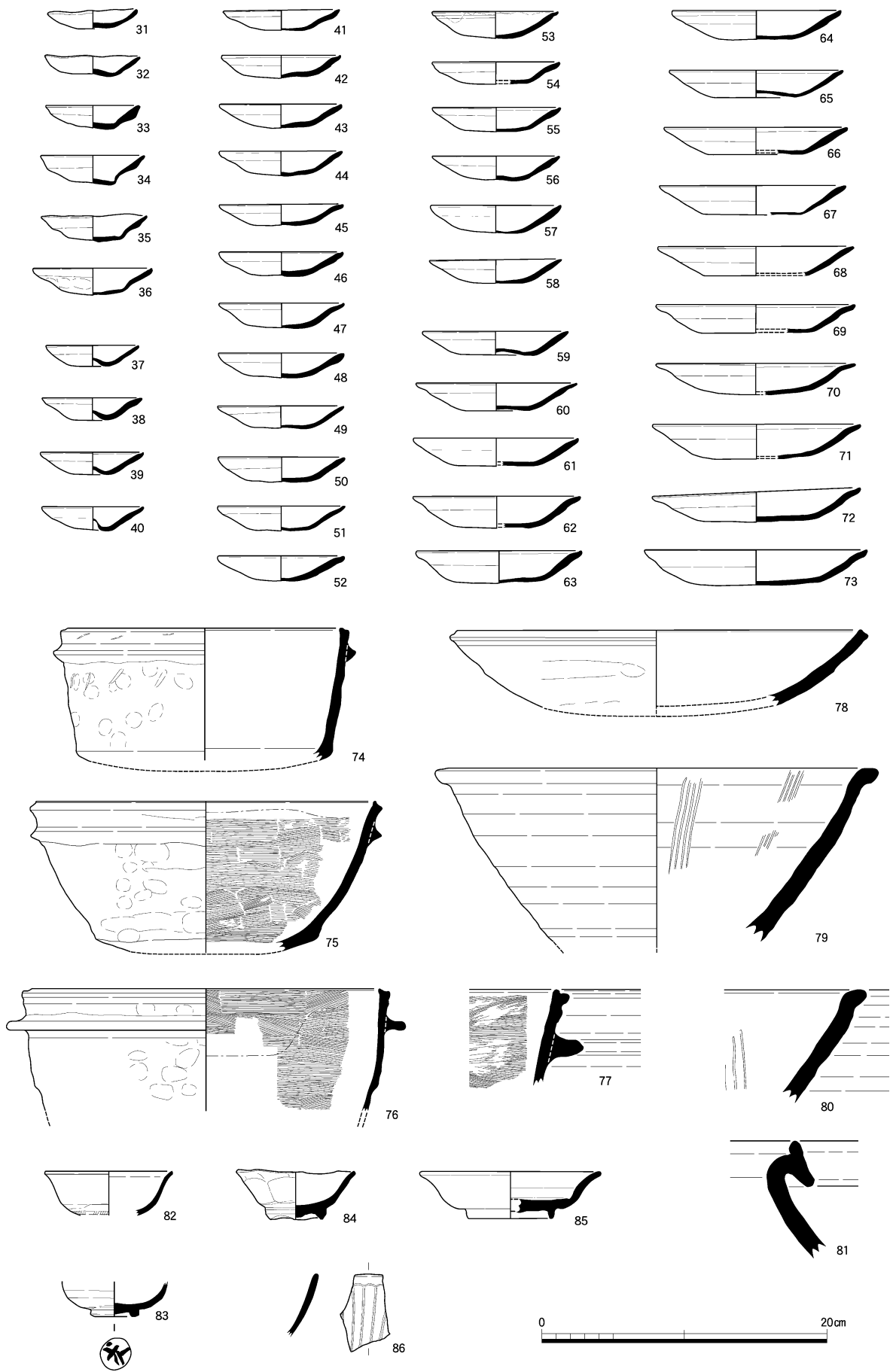


図 19 SD115 第 3 層・落ち込み層出土土器実測図 (1 : 4)

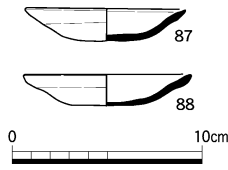


図20 SD130 出土土器
実測図(1:4)

いずれも口縁部が屈曲して立ち上がる。Sh(37~40)は6.6~7.0cm前後。Sb(41~58)は口径8.1~9.3cmで、8cm後半台に集中する。Sには大中小があり、S小(59)は口径10.1cm。S中(60~65)は口径11.2~11.9前後。S大(66~73)は口径12.8~13.8cmと14.5~15.5cmの2群が見られる。第1層・2層同様に白系皿は器表色が灰白色、黄灰色を主体とする胎土の顕微なものが多く、S

になると橙色系のもが見受けられる。また、口縁部が伸長して、広がるものがあり、口径が13cm台後半、器高が2cm台以降が多くなる。手法は第1層・2層と同様であるが、Sbには内面にナデ上げ痕を残すものがある。器表色が橙色系のS(62・64・69~72)には圈線が古相を呈するものがある。

瓦器には羽釜(74~77)、鍋(78)がある。羽釜は体部が、直線気味に立ち上がるものと、内湾して立ち上がる2群がある。調整痕跡は内面刷毛目痕跡が残り、体部はいずれも指圧痕が残る。鍋は方形の口縁端部を有するもので、台型で成形された可能性がある。いわゆる口縁部が屈曲する前段階の焙烙鍋の資料である。

焼締陶器には信楽播鉢(79・80)、甕(81)がある。播鉢はいずれも胎土は粗く軟質で、口縁部は折り返されて丸く収める。79は播り目が4本1単位。甕は鎌倉時代に属する常滑産の甕である。N字状の口縁部を有する。

輸入陶磁器には白磁椀(82~84)、青磁椀(86)・皿(85)がある。白磁は白濁した釉が施され、下半部からは露胎となる。83には高台裏に墨書が記されるが、判読不明である。84は高台暈付がアーチ状に削り込まれ、体部に面取りが施される。青磁椀は線描きの細蓮弁文椀、鎌倉時代以降からの古期に属する稜皿がある。

SK130 出土土器(図20、附表1)

SD115からは土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土している。図示できたものには土師器皿Sb(87・88)がある。口径8.5cm前後、器高1.7cm前後。土器年代はX期中に属する。

SD119 出土土器(図21、表4、附表1)

SD119からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、輸入陶磁器、瓦、土製品、木製品、石製品などが出土している。出土土器の総破片数は914片あり、その内訳は土師器84.7%、瓦器12.4%、国産施釉陶器0.8%、焼締陶器1.6%、輸入陶器0.5%である。土師器皿の数量が多く、次いで瓦器の鍋釜類が多い。土器年代はX期古に属する。

図示できた土師器皿は、白系のSh、Sb、S(大・中・小)に分類でき、器表色は橙色が主体となり、器厚は厚くなる。Sh(89~91)は口径は6.7~7.2cm。Sb(92~95)は口径8.2~8.4cm。Sは大中小があり、S小(95)が口径10.3cm、器高も2.4cmと高い。S中(96・97)は口径11cm台。S大(98)は口径14.4cm。

瓦器には羽釜(99~103)がある。三角形の短い鏝が付くものと、丸く収めた突出する鏝を

表4 SD119 出土土器比率

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	碗・皿	774	100.0%
	鉢・盤	0	0.0%
	甕・鍋・釜	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	774	100.0%
瓦器	碗・皿	0	0.0%
	鍋・釜	104	92.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	8	7.1%
	その他	1	0.9%
	不明	0	0.0%
	小計	113	100.0%
国産施種陶器	碗・皿	3	42.9%
	壺・瓶	1	14.2%
	その他	3	42.9%
	不明	0	0.0%
	小計	7	100.0%
焼締陶器	壺	4	26.7%
	甕	8	53.3%
	播鉢・盤	2	13.3%
	その他	1	6.7%
	不明	0	0.0%
	小計	15	100.0%
輸入陶磁器	碗・皿	5	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%
	その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%
	小計	5	100.0%
他	他・不明	0	— 0.0%
総数		914	— 100.0%

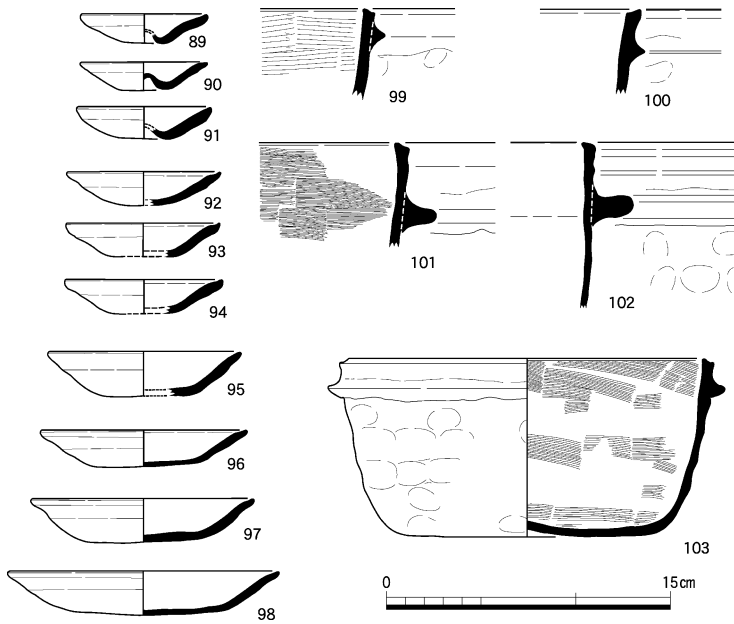


図21 SD119 出土土器実測図 (1 : 4)

有する大型のもの(102)がある。

SX200 出土土器

土師器、須恵器、黒色土器、輸入陶磁器、瓦、鬼瓦などがある。出土遺物は小片であることから図示はできなかったが、時期推定可能な土師器皿には、丁寧な削りを施されたI期新に属する碗Aがあり、他には京都II期古～中に属する杯、皿などの9世紀代の出土品がある。なおSX200Bからは遺物が出土していない。

(3) 瓦類 (図22、図版6)

複弁八葉蓮華文軒丸瓦(瓦1) 平坦な中房に1+8の蓮子を配する。外区に珠文はなく、二重圏線が巡る。周縁は傾斜面で線鋸歯文が巡る。胎土はやや軟質で灰白色。平城宮6226形式⁶⁾。平城宮からの搬入瓦である。SD115第3層・落ち込み層より出土。

均整唐草文軒平瓦(瓦2) 全体に磨滅が激しいが、中心飾りに「旨」銘を配する。唐草文は緩やかに反転し、主葉・子葉は強く巻き込み、先端が丸く肥厚する。胎土はやや軟質で灰白色。長岡京7722型形式⁷⁾。長岡京期の搬入瓦。SD115第3層・落ち込み層出土。

均整唐草文軒平瓦(瓦3) 唐草文は各单位が離れて、主葉は強く巻き込む。外区珠文は粗く配する。凹面に布目が残存し、瓦当部上端はケズリ、下端はヨコナデ。胎土は硬質で灰色。平安時代前期に属し、芝本産。木村159と同文。SD115第2層出土。⁸⁾

均整唐草文軒平瓦(瓦4) 外区珠文は小さく、上下外区の珠文は密で、脇区は粗く配する。唐草文は巻き込みがやや緩く、先端部は丸く肥厚する。平瓦凹面は布目一部残る。平瓦凸面はヨコナデ。胎土は硬質で灰白色。平安時代前期に属し、山城産。SD115第2層出土。

均整唐草文軒平瓦(瓦5) 外区に珠文が巡り、唐草文は緩やかに反転する。中心飾りに対向C

字文を配するものであるが、欠損している。瓦当上端はヘラケズリ。下端はヨコナデ。平瓦凹面には布目が残る。平瓦凸面はタテ方向にヘラケズリ。胎土は硬質で灰色。平安時代中期に属し、洛北幡枝産。木村 746 と同文。⁹⁾SD115 第 2 層出土。

巴文軒丸瓦（瓦 6）左巻き三巴文を配する。外区の珠文は大きく密に巡り、珠文間には鋸歯文を配する。巴文の上端は平坦で幅広を呈し、尾は接して圏線状になる。範への打ち込み粗く、文様は粗い。丸瓦凹面に布目痕が残る。胎土は粗く、硬質で明褐灰色。平安時代後期に属し、幡枝産。SK69 出土。

偏行唐草文軒平瓦（瓦 7）外縁と圏線間幅が狭く、範傷がある。唐草文は大きく反転して主葉、子葉ともに肥厚。先端は大きく膨らむ。顎下端、瓦当面裏には縄タタキの痕跡が残る。胎土はやや軟質で灰白色。尊勝寺出土例が見られる。¹⁰⁾平安時代後期に属する。丹波産。SD115 第 2 層出土。

幾何学文軒平瓦（瓦 8）斜格子目文を配する。半折り曲げ技法で成形され、曲線顎。瓦当下端はヘラケズリ。瓦当裏面から平瓦凸面にかけて指圧痕が残り、平瓦凹面には細かい布目が残る。瓦当上端部は面取り。胎土は硬質で灰白色。平安時代後期に属し、山城産。第 2 層掘り下げより出土。

剣頭文軒平瓦（瓦 9）折り曲げ技法で成形される。平瓦凹面から瓦当面にかけて布目残り、瓦当裏面から平瓦凸面にかけて折曲げの皺が残る。平安時代後期に属し、山城産。SD115 第 2 層出土。

花文軒丸瓦（瓦 10）T 字形の単弁間に丸い間弁を配し、蓮子は中央部に 1 配する。界線は円形ではなく、弁端の膨らみに合わせた花びら形を呈する。丸瓦凹面に布目、丸瓦凸面に縄タタキ痕跡が残る。瓦当裏面から丸瓦凹面にかけてナデ。胎土は軟質で灰白色。平安時代後期から鎌倉時代に属し、山城産。SD115 第 2 層出土。

均整唐草文軒平瓦（瓦 11）界線、珠文はなく唐草文を配する。主葉は 3 反転し、先端の巻き込みは緩い。中心飾りは三葉形の変形文を配するものか。瓦当上端は面取りされ、瓦当裏面から丸瓦凸面に、型台の圧痕が明瞭に残る。胎土は硬質で灰色。瓦 12 と同文。鎌倉時代から室町時代に属する。第 2 層出土。

均整唐草文軒平瓦（瓦 12）瓦 11 と同文。成形時の器台痕が明瞭に残る。手法など同様である。鎌倉時代から室町時代に属する。第 1 層出土。

均整唐草文軒平瓦（瓦 13）瓦 14 と同文。小型の瓦で界線、珠文はなく反転する唐草文を配する。瓦当裏面から丸瓦凸面に、型台の圧痕が明瞭に残る。瓦当部上・下端は面取り、平瓦凹面は布目痕をナデ消し。凸面はタテナデ。胎土は硬質で浅黄橙色。鎌倉時代から室町時代に属する。SD115 第 1 層出土。

均整唐草文軒平瓦（瓦 14）瓦 13 と同文で、4 反転する唐草文を配し、中心飾りは菱形中央に×を入れる。手法・胎土・胎色などは瓦 13 同様。鎌倉時代から室町時代に属する。SK63 出土。

巴文飾瓦（瓦 15）方形状の基部に瓦当部が貼り付けられる。瓦当文様は密に巡らされた珠文内に巴文を配する。巴文は右巻きで、界線と尾は接する。裏面ヘラナデ、側面は丁寧なナデ。鎌倉時代から室町時代に属する。SD115 第 1 層出土。

飾瓦（瓦 16）飾瓦の一部か。2 条の曲線内に線刻で円形文が配される。中央部側面は成形され

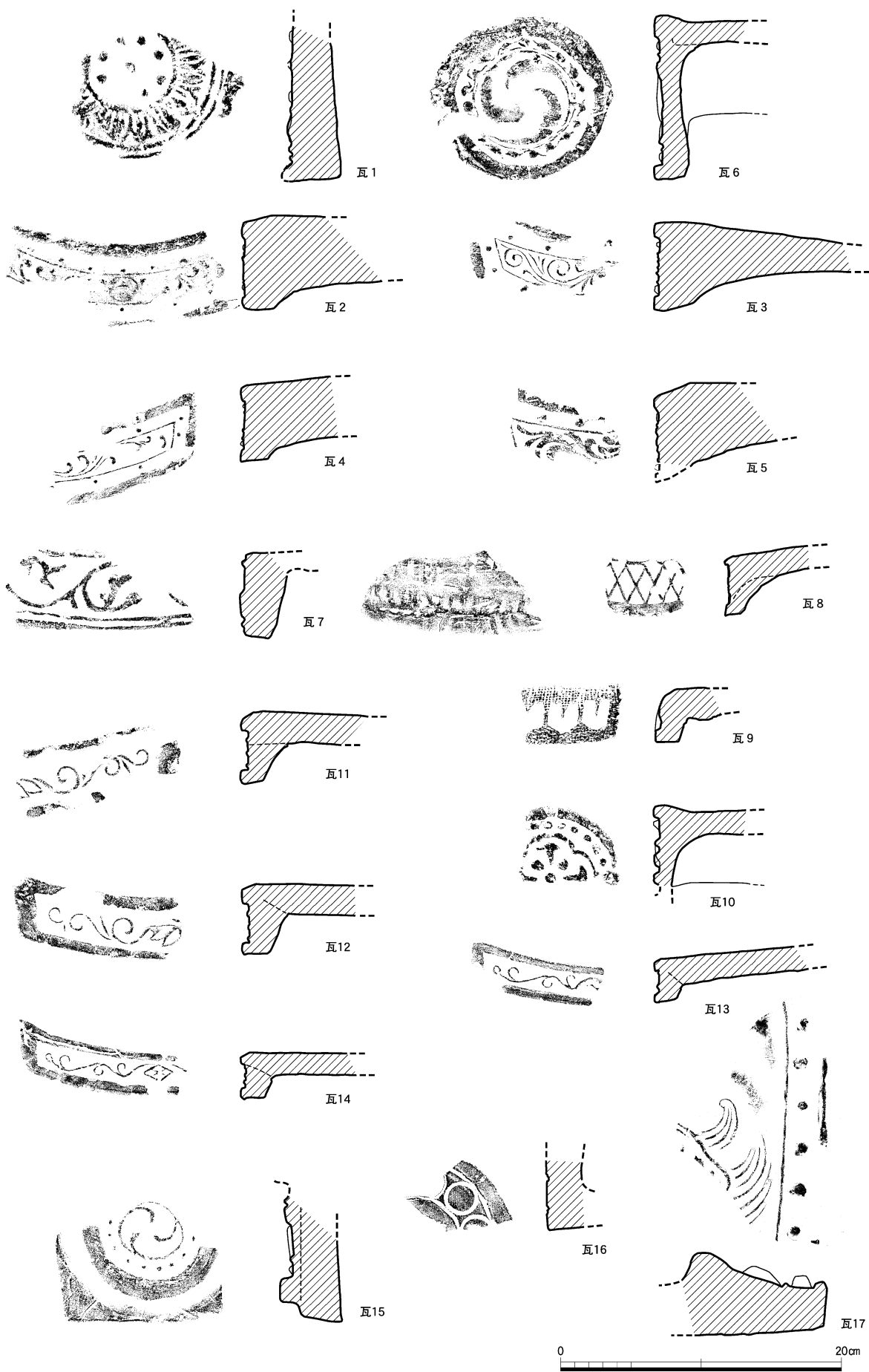


图 22 軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・飾瓦拓影・实测图 (1 : 4)

ているが、全体の詳細は不明。胎土は硬質で明褐灰色。鎌倉時代から室町時代に属する。第1層出土。

鬼面文鬼瓦（瓦17）界線と周縁内に突出した珠文が密に巡る。界線内は鬼面の眉と頬が大きく盛り上がる。歯牙はむき出して、その周縁から髭が、弧を描き上方に延びる。やや小型の鬼瓦である。側面は丁寧にヘラケズリされ、裏面はヘラケズリ後ナデ。胎土は硬質で灰白色。平安時代前期に属するものか。SX200 最下層出土。

（4）漆器類（図23）

漆器椀（漆1）大振りの椀である。器の器厚は厚く成形され、高台には黒漆が塗られ、高台以外は赤漆が塗られる。文様は黒漆で描かれ、内面に扇の大を見込に、小を体部周縁三方に配する。外面にも扇の大一部が確認できる。SD115 第3層・落ち込み層出土。

漆器椀（漆2）薄手の椀である。高台には黒漆が塗られ、高台以外は赤漆が塗られる。文様は高台裏に不明文様が見られるが、他の部位は不明。非常に丁寧に成形・塗りが施された上級品、根来系の漆器椀に属する。SD115 第3層・落ち込み層出土。

漆器椀（漆3）形態は143に似る小型の椀。全体に黒漆が塗られ、見込みに不明文様を赤漆で描く。SD115 第3層・落ち込み層出土。

漆器不明製品（漆4）板状のもので、長さ24.0cm、残存幅3.3cm。内面に下部に黒漆が残る。上端部は丸く成形され、外面下端は斜め方向に面取りされる。桶の器側板で、漆は2時的に付着したものであろう。SD115 第3層・落ち込み層出土。

なお漆椀の詳細分析等は作陽大学の北野信彦氏にお願いし、概説を付章で記述して頂いた。

（5）その他の遺物

木製品（図24）

球状製品（木1）球状を呈する。6段階に横方向に削って成形される。高さ4.95cm、最大径5.9cm。SD115 第3層・落ち込み層出土。

銭貨（図24）

開元通寶（銭1）背面に上に「一」の字。左に「宣」の字が入る。武宗の845年（会昌5）に補鑄されたものか。¹¹⁾SD119 出土。

熙寧元寶（銭2）字体が剥落気味である。銭の書体は篆書である。Pit 5 出土。

永樂通寶（銭3）第1面整地層出土。

金属製品（図24）

小柄（金1）方形状の銅製品である。長さ9.0cm、幅1.3cm、孔径0.2cm。折り曲げて成形され空洞を有する。大半は欠損部が欠損している。文様はなく先端部には孔が穿たれる。小柄の柄であろうか。SD115 第3層出土。

火箸（金2）銅製の火箸である。断面円形で長さ約30cm。上端部には輪状の金具紐が付くものである。SD115 第2層出土。

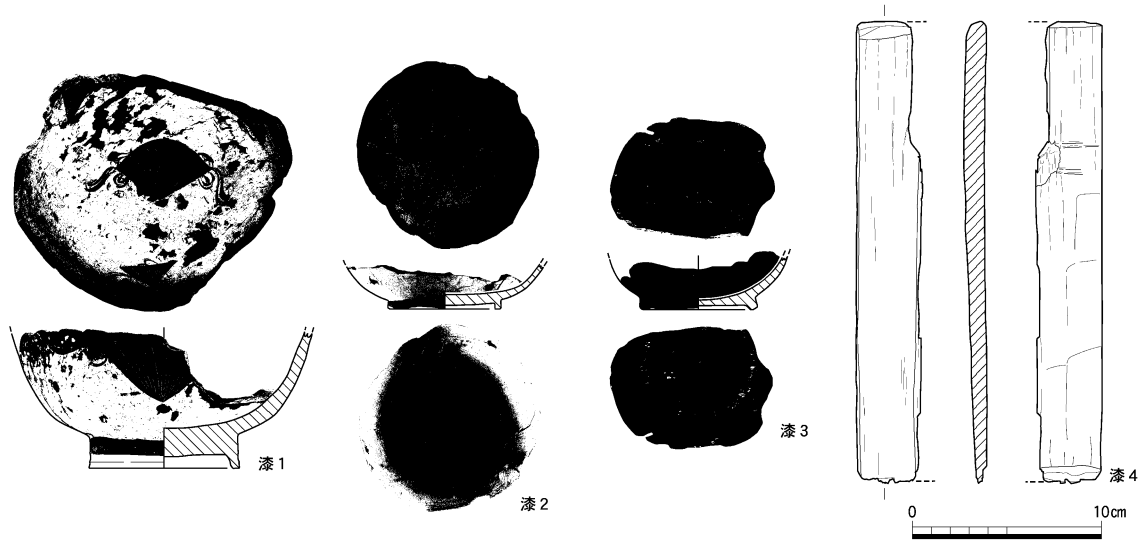


図 23 SD115 出土漆器類実測図 (1 : 4)

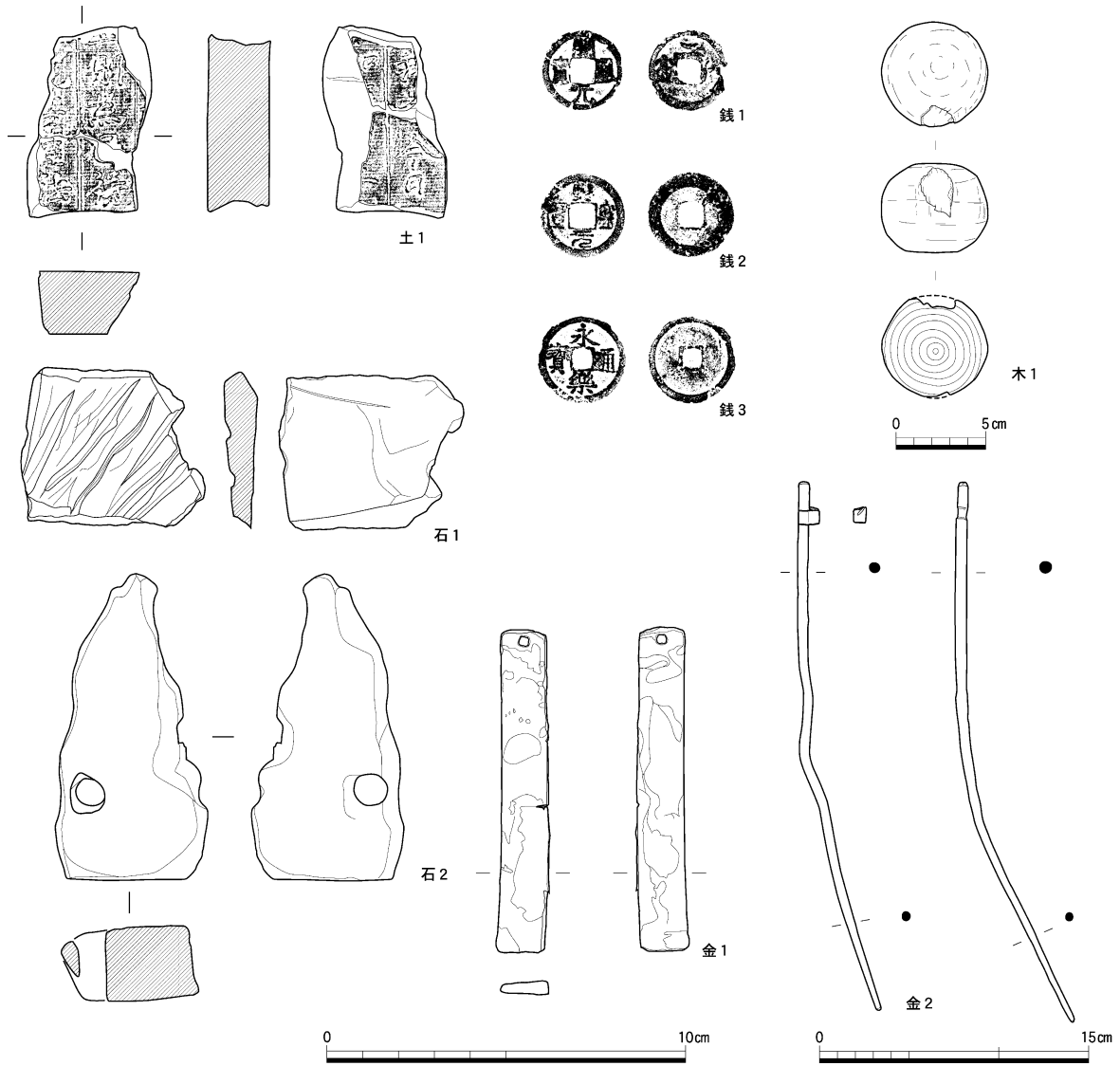


図 24 その他の遺物拓影・実測図 (1 : 2、1 : 4)



図25 瓦経

石製品 (図24)

砥石 (石1) 短形状の薄いもので、残存長辺 5.0 cm、短辺 4.5 cm、厚さ 0.9 cm。斜め方向溝状に使用痕跡が明瞭に残る。北東部第2面の包含層出土。

温石 (石2) 残存長 8.6 cm、残存幅 4.3 cm、厚さ 2.0 cm、孔径 0.9 cm。滑石製の温石である。不定型な形であるが、1箇所に通す孔が穿たれる。SD115 第1層出土。

土製品 (図24・25)



図26 火山灰ガラス (×40)

瓦経 (土1) 粘土板の瓦経である。碁盤目状罫線の中に経文を書写される。表右「則為已得」、左「□菩薩法」。裏右「我□今日」、左「□□□□」。四文字単位で彫り記される。金明光経第八の一部に同じ経文が見られる。SD115 第1層出土。

自然遺物 (図26・27、表6)

自然遺物にはSD220から採取された火山灰・木片(榎木)がある。火山灰はNo.5層(図14参照)2.5Y7/4浅黄色微砂層からサンプルしたものである(図26)。5層は約0.1～0.2mの堆積を確認した明確な堆積層である。火山灰はバブル型を主体とする火山ガラスが多く確認できる。植物遺体サンプルは表6、図27を参照。

表5 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
奈良時代	軒丸瓦		軒丸瓦1点		
長岡京期	軒平瓦		軒平瓦1点		
平安時代	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入(青磁・白磁)、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、丸瓦、平瓦、銭貨		軒丸瓦1点、軒平瓦5点、鬼瓦1点、銭貨1点		
鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入(青磁・白磁・青白磁)、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、丸瓦、平瓦		軒丸瓦1点		
室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、国産陶器、輸入(青磁・白磁・鉄釉・褐釉)、軒丸瓦、軒平瓦、飾瓦、丸瓦、平瓦、漆器類、木製品、金属製品、銭貨、石製品、土製品、人骨、獣骨		土師器75点、瓦器13点、焼締陶器6点、国産陶器1点、輸入陶磁器8点、軒平瓦4点、飾瓦2点、漆器類4点、木製品1点、金属製品2点、銭貨3点、石製品2点、土製品1点		
江戸時代	国産陶磁器				
合計		91箱	133点(6箱)	84箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より13箱多くなっている。

表6 SD220 採取自然遺物一覧表

番号	和名	部位	科名	個数	生息場所
1	イラクサ	果実	イラクサ	7	山野
2	ミズ属	果実	イラクサ	35	湿地
3	タデ科	果実	タデ	1	山野・湿地
4	ナデシコ科	種子	ナデシコ	4	道端・山野
5	アカザ属		アカザ	3	道端
6	ノミノツツリ	種子	ナデシコ	2	道端
7	キケマン属	種子	ケシ	2	山野
8	マタタビ	種子	マタタビ	3	山地
9	ヘビイチゴ属	果実	バラ	1	道端
10	キジムシロ属	果実	バラ	1	山野
11	セリ科	果実	セリ	1	山野・湿地
12	メハジキ	果実	シソ	3	道端
13	シソ科	果実	シソ	1	野原・道端
14	ニワトコ	核	スイカズラ	3	適潤地
15	イネ科	穎	イネ	2	原野・道端
16	スゲ属	果実	カヤツリグサ	1	湿地
17	カヤツリグサ科	果実	カヤツリグサ	11	原野・湿地

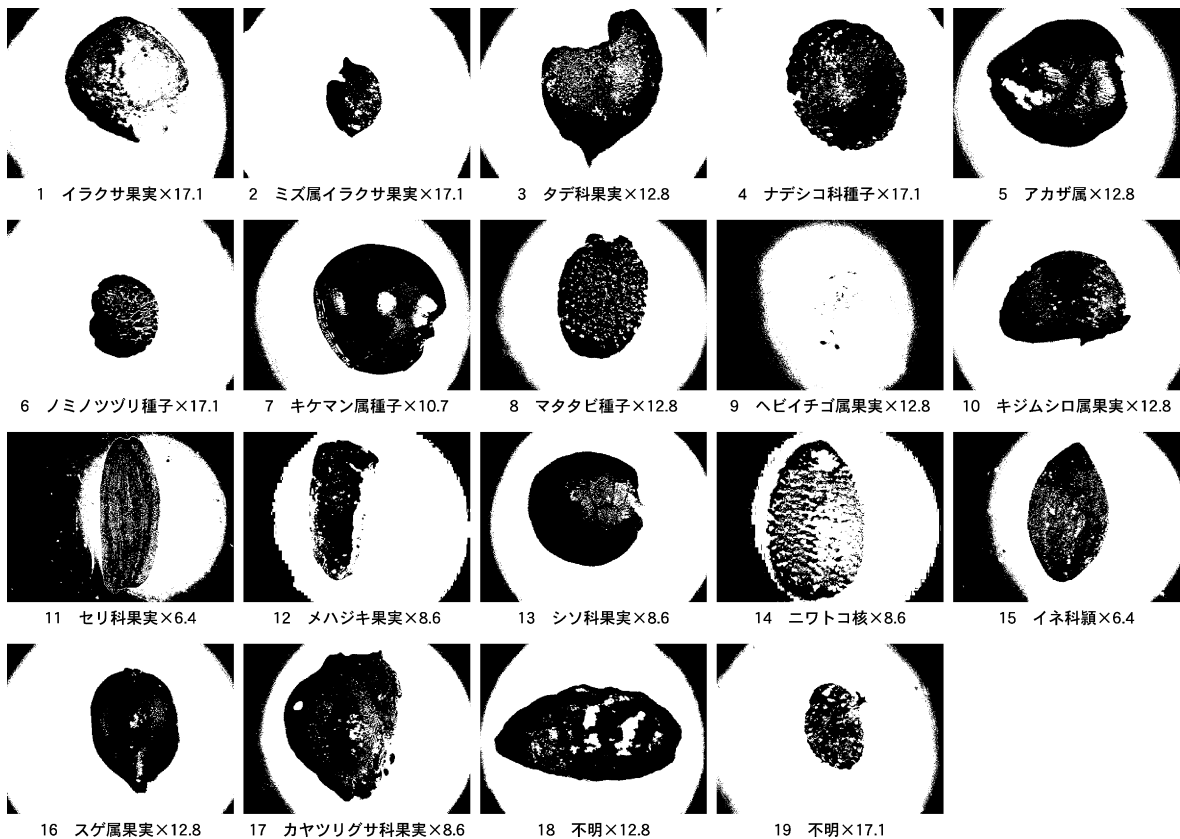


図27 SD220 採取自然遺物

4. まとめ

今回の調査によって検出した遺構の成果について概説し、まとめとしたい。調査によって検出した遺構は、室町時代後期の遺構群が主である。この中で堀 SD115 が特記すべき遺構となった。SD115 は櫛笥小路の中央を南北に縦断することから、平安時代の条坊を踏襲しながら、築地ライン際に沿って南北に造られたと思われる。おそらく堀に伴う宅地関連遺構は調査区外の西部に展開するものと考えられる。堀に付随する遺構として考える SK130 などを検出したが、土塁は検出していない。堀を掘削する際に、掘られた残土を堀の片側脇に積みながら、土塁を構築していき、廃棄時には土塁の土を埋め戻すという過程が当然考えられるが、この堀の場合は土塁の存在は不明である。しかし前述した西から埋められた形跡があること、上層遺物にも古期の遺物が混じることなど、西部に土塁が存在した可能性はある。

また、この堀の性格として、周辺が法華寺院の密集地であることから、他宗派からの攻撃に備えるために城塞化した寺院関連の構の一部であった可能性が高い。周辺の寺院について中世城郭想定図¹³⁾、絵図¹⁴⁾などと照合すると、四条通南側の立本寺・本隆寺などがそれに該当する。1981年に四条通を挟んで南側、壬生賀陽御所町で実施された調査において、北部に木樋を据えた南北暗渠溝（残存長 13.0 m、幅 1.0 m、深さ 0.5 m）、東部に南北溝（残存長 28 m、幅 2.5 m、深さ 0.7 m）、西部ではその溝を切る新期の東西堀（残存長 5.5 m、幅 4.0 m、深さ 1.7 m）、北岸に石垣を据える、溝（東西約 7.0 m、南北約 15.0 m）など同様な性格を持っているとみられる室町時代の遺構を検出していることから、それが窺える。

この堀 SD115 が構築された時期としては、最下層に当たる第3層・落込みからX期中（古相）に属する土師器皿が出土している。天文法華の乱（1536年）が起きる以前の土器の年代観とも合

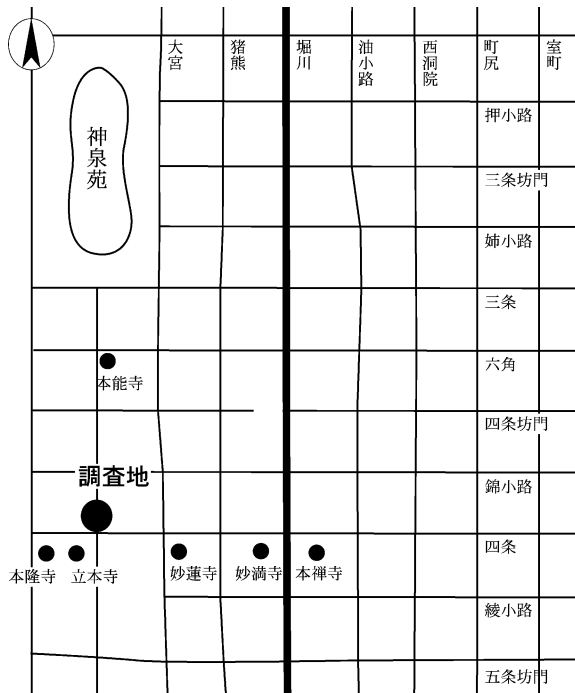


図 28 天文法華の乱頃の周辺地法華寺院配置図
「京都の歴史」第3巻(近世の胎動)別添地図より転載・合成作

致する。つまり他宗派からの圧力に晒された法華宗徒が、戦闘に備えて寺院周辺を構えとして構築せねばならなかった時期が、この頃（1530年前後）であった。そして乱後に寺院関連が灰燼となり、構えとしての機能を終えた堀が、完全に埋められた時期も、出土遺物からみて大きな時期差は認められず、乱後には迅速に埋められた様子が窺える。

次に堀より古期に相当する溝 SD119 と堀 SD115 の関係であるが、SD119 は櫛笥小路東限築地中心ラインの西約 4.0 m に位置する。この溝が櫛笥小路の道幅を西側に縮小された時期の側溝であったとするなら、縮小された櫛笥小路に沿って堀が構築されたと考えることができる。

中世の他の時期の遺構として認識できるものは、残念ながら検出できなかった。遺物としては、混入品として鎌倉時代から室町時代前期の輸入陶磁器、須恵器（東播系鉢）があり、周辺には、それらを伴う遺構が存在したことは想像に難くない。しかし、堀を構築する以前の溝・整地土・土取穴などから出土した遺物からみて、調査区内では16世紀前後を境に、整地造成が行なわれたとみられる。

平安時代の遺構としては、調査目的の一つとして、調査区の東隣で2006年に検出された池状遺構の南西延長部分の検出にあった。調査で検出した北端部のSX200・200Bがそれに該当するものと考えられるが、SD115に削平され検出範囲が狭く、堆積状況が浅いことから現時点では即断できない。しかし、堆積土層に包含された遺物は平安時代前期に属する遺物であり、この地区でしか前期の遺物が出土していないことから、2006年調査の池状遺構の一部であった可能性は高い。なお、条坊に関連する櫛笥小路の路面などは検出できなかった。

平安時代以前の遺構としては流路があげられる。全面的な検出には至らなかったが、流路は東西両方向から流れ込み、緩やかな傾斜で南部で合流する。2006年調査でも池の下層に北北西から南南西に流れる流路を確認しており、この流路が方向を変えて、調査区西部に流れ込んだものと推測できる。東部からの流れは、また別の流れ込みが考えられる。これら流路を利用して構築された池が、2006年調査の池状遺構であろう。なお、この流路堆積で火山灰の堆積を確認したことは貴重な資料となった。

最後に今回調査の最大の成果は、法華寺院関連の堀と推測される構の一部を検出したことにより、周辺の戦国期末の様相を考える上で貴重な資料が得られたことである。そして法華宗寺院の惣構としては終焉を迎えたが、後に町衆が連合した自治組織として、惣構・町組が成立し始めるのが法華の乱前後（誓願寺文書には天文六年正月三日条「下京五町組」が見られる）であることから、今後さらに周辺の遺構群・遺物との関連を精査しながら、戦国期末惣構の検討を進めていくことが必要となった。

註

- 1) (財)古代学協会・古代学研究所編集『平安京提要』角川書店 1994年
- 2) 『新修京都叢書 第20巻 京都坊目誌』臨川書店 1970年
- 3) 『京都歴史アトラス』京都歴史アトラス 足利健亮 中央公論社 1994年
- 4) 「京都市内およびその近辺の中世城郭」-復元図と関連資料- 山下正男 1986年
- 5) 『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6) 「平城京・藤原宮出土軒瓦型式一覧」奈良国立埋蔵文化財研究所 1996年
- 7) 『長岡京古瓦集成』向日市埋蔵文化財センター 1987年
- 8) 『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 9) 註8と同じ
- 10) 註1と同じ 660頁 図2 12世紀前葉の軒瓦-9と同文
- 11) 永井久美男編『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会 1996年

- 12) 橋詰秀一『仏教考古学辞典』雄山閣 2003年
- 13) 註4と同じ
- 14) 森幸安「中昔京師地図」

5. 付章 出土漆器資料の材質・技法

北野信彦

1、はじめに

今回の調査からは、応仁の乱当時の溝跡が検出され、ここからは漆器資料も出土した。今回、これらの材質・技法に関する文化財科学的調査を行ったので、その結果を報告する。

2、出土漆器の調査

2.1 調査対象資料

今回調査を行った漆器資料は、ろくろ挽き物である椀および椀破片資料合計 10 点である。いずれも京都市中では出土例が少なく稀少であるが、実用性が高い中世・室町期の生活什器である。

2.2 調査方法

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり、ろくろ挽き作業により挽き物の椀型形態にする「木胎製作」の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、漆絵などの加飾や研磨作業を行う「漆工」の工程から成っている。本報では、まず各資料の器形や残存状態、漆塗り表面の状態などを肉眼観察した後、実体顕微鏡による細部の観察を行った。次に、自然科学的手法を用いた、①木胎の樹種同定、②木取り方法、③漆塗り構造の分類、④赤色系漆の定性分析、などの材質・技法の組成に関する調査を行った。以下、調査方法を記す。

(1) 木胎の樹種同定

樹種の同定は、出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、本体をできるだけ損傷しないよう、破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。切片は、サフランニン・キシレンを用いて常法に従い染色と脱水を行い、検鏡プレパラートに仕上げた。

(2) 木取り方法

挽き物類である漆器資料の木取り方法の検討は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行った。

(3) 漆塗り構造の分類

まず肉眼で漆塗り表面の状態を観察した後、実体顕微鏡を用いた細部の観察を行った。次に 1 mm×3 mm 程度の漆膜剥落片を採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイト GY1251J.P ハードナー HY.837）に包埋した後、断面を研磨した。この断面試料の漆塗膜面の厚さ、塗り重ね構造、顔料粒子の大きさ、下地の状態などについて、金属顕微鏡による落射観察を行い、一部の代表的な漆器については生物顕微鏡を用いた薄層の透過観察を併用した。

(4) 赤色系漆の使用顔料

赤色系漆の使用顔料に関する定性分析は、採取可能な部分の漆膜剥落片をカーボン台に取り付け、日立製作所 S-415 型の走査電子顕微鏡に堀場製作所 EMAX-2000 エネルギー分散型 X 線分

析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー）を連動させて使用した。分析設定時間は 600 秒。さらに、クロスチェックを行うために（株）堀場製作所 MESA-500 型の蛍光 X 線分析装置に設置して、特性 X 線を検出した。設定条件として、分析積算時間は 600 秒、試料室内は真空状態、X 線管電圧は 15kV および 50kV、電流は 240 μ A および 20 μ A、検出強度は 40,000cps、定量補正法はスタンダードレスである。

2.3 調査結果

以上、10 点の出土漆器資料の分析を行った（表 7）。まず、本漆器資料の樹種同定を行った結果、挽き物類である椀型資料は、いずれも広葉樹材が選択されており、ブナ（1 点）、ケヤキ（2 点）、カバノキ科（1 点）、トチノキ（4 点）、ホオノキ（2 点）が用いられていた。そして各資料の木取り方法は、いずれも横木地であるが、板目取りもしくは柃目取りが確認された（図 29）。

通常、江戸時代中期以降の椀木地の用材にはトチノキ・ブナ・ケヤキ材が中心となるが、中世段階から近世初頭期には、全国的に樹種の多様性が見出され、とりわけクリ・コナラ・シオジ材の使用が特徴的である点が調査者のこれまでの基礎調査で明らかになっている（表 8）。本漆器資料群の場合、それ以前の資料群ではあるが、ケヤキ・トチノキ・ブナ材で全体の 70%、とりわけトチノキ材が全体の 40% の高い占有率を占めていた（図 31）。

次に、個々の資料の漆塗り構造、特に各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層をみると、無機物を含んでいないためピークがほとんど見出だされない資料と、Al（アルミニウム）、Si（シリカ）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Fe（鉄）など粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料に分けられた。さらにこれらを顕微鏡観察することにより、前者を、炭粉を柿渋や膠などに混ぜて用いる炭粉下地、後者を、細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）と理解した。このうち、80% を占める炭粉下地の上に上塗りの漆層を一層塗布する技法は、実用的な出土漆器椀類に一般的にみられる特徴である。そして、加飾の漆絵はいずれも地の上塗り漆の上に描かれていた（図 30、図 34- 1・2）。一方、地塗りに内外赤色系漆を塗布した椀型資料は、いずれもサビ下地を施したやや優品であった。次に、本漆器資料における赤色系漆の使用顔料を電子線マイクロアナライザーおよび蛍光 X 線分析した結果、いずれも水銀（Hg）成分が強く検出される資料と、水銀（Hg）と鉄（Fe）の両者が強く検出される資料に分類された（図 32・33）。これらはいずれも顕微鏡観察で朱（辰砂もしくは水銀朱 HgS）の赤色顔料の粒が確認された。そのため、前者を朱漆、後者は朱とベンガラの両者をブレンドした赤色漆であると理解した。

なお資料 1・10 の椀型資料は、優良材であるケヤキ材の木胎の上に堅牢性を重視した布着せ補強を伴うサビ下地を施し、その上に中塗りの黒漆を塗布し、さらに上塗りの朱漆が塗り重ねられていた。これは、漆工史の分野では中世漆器を代表すると位置づけられている「根来系朱漆器」では、正統的もしくは典型的とも評せられる技法である（図 34- 3・4）。そしてこの資料は、比較的粒度が均質で細かく揃った朱顔料による良好な赤い発色を呈する朱漆が、内外面ともに上塗

りされており、良質な朱漆器であったことが理解される。

一方、資料7は、ブナ材に炭粉下地を施した上に一層の上塗り漆を塗布する、基本的には一般的な塗り技法を有するやや大振りの漆器椀である。調査の結果、地塗りの朱漆に使用される朱顔料の粒度は極めて均一で良好な発色を有していた（図34-5・6）。また、内外面に描く豪放な肉筆の扇模様には、一部引っ掻き技法を併用していた。扇模様を描く大振りの漆器椀は、清洲所か町遺跡や一乗谷遺跡など、やや年代が下る資料にも見られるが、本資料はそれよりデザイン的にも優れている。今後、漆工史の分野においても、資料的にも稀少な室町期を代表する漆器椀として、資料1などとともに位置づけられよう。

（引用文献）

北野信彦 (2005) 『近世出土漆器の研究』、吉川弘文館

北野信彦 (2005) 『近世漆器の産業技術と構造』、雄山閣

北野信彦 (2005) 『漆器の考古学 - 出土漆器からみた近世という社会 -』、あるむ出版

表7 SD115 出土漆器観察表

資料 No.	器形	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備 考
				内	外	文様	内	外	内	外	文様	
1	椀	ケヤキ	B	赤	赤	高台内黒 朱目印	VII	VII	朱	朱		漆2 布着せ補強：黒-朱
2	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-黒	I	II	朱		朱	
3	椀	トチノキ	A	黒	黒	内-絵-黒	II	I	朱・ ベンガラ			漆3
4	椀	ホオノキ	A	赤	黒	内・外-絵-赤	II	II	朱・ ベンガラ	朱	朱	
5	椀	トチノキ	A	黒	黒	内・外-絵-赤	II	II			朱	
6	椀	ホオノキ	B	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱		朱	
7	椀	ブナ	A	赤	赤	内・外-絵-黒	II	II	朱	朱		漆1 扇文様：引っ掻き技法 朱顔料：細
8	椀	カバノキ 科	A	赤	黒		I	I	朱・ ベンガラ			
9	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱		朱	亀鶴文様
10	椀	ケヤキ	B	赤	赤		VII	VII	朱	朱		布着せ補強：黒-朱

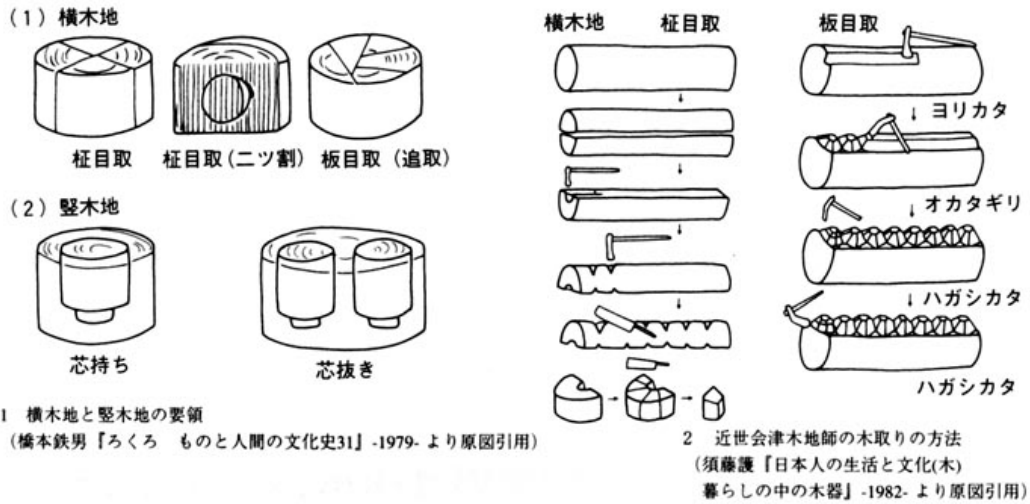


図 29 近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法

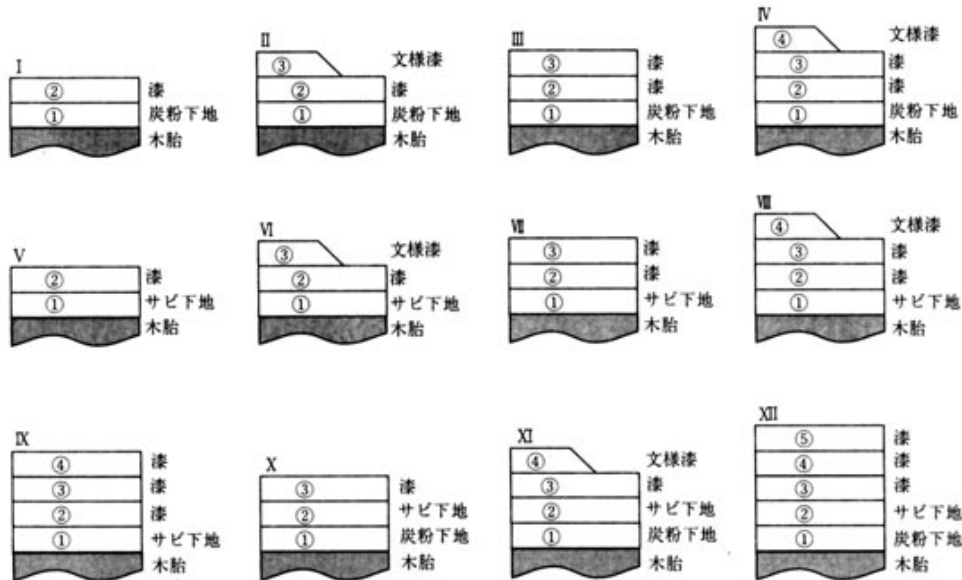


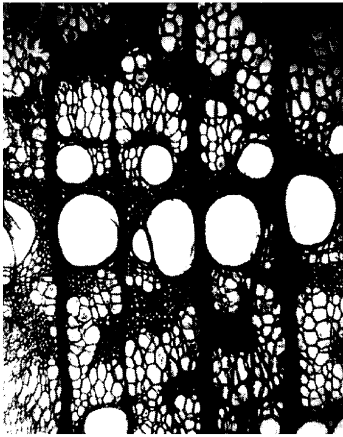
図 30 漆塗り構造の分類

表 8 ろくろ挽き物の用材分類一覧表

A 環 孔 材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリ ギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靱性もあり、木皿など薄手の物に適する。
B 散 孔 材	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ 類、ヤマザクラ、ウワミズザク ラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なく、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c. ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カ ツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大きい。
	d. エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

橋本鉄男『ろくろ ものと人間の文化史31』-1979-などを参考にして作成

にれ科ケヤキ



木口 (30×)

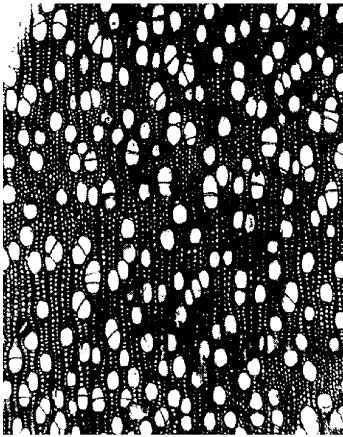


柁目 (100×)



板目 (50×)

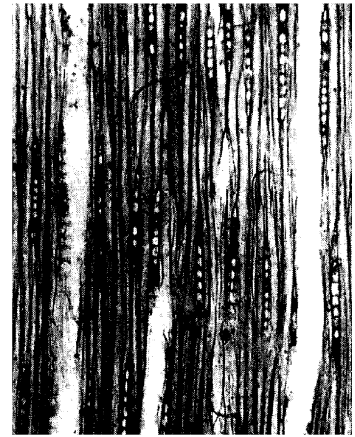
とちのき科トチノキ



木口 (30×)

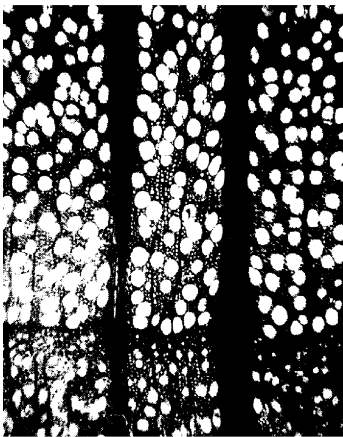


柁目 (100×)



板目 (50×)

ぶな科ブナ



木口 (30×)



柁目 (100×)



板目 (50×)

図 31 代表的な樹種同定写真

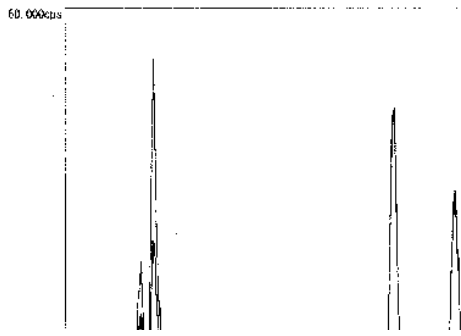


図 32 赤色系漆の蛍光X線分析結果 (1:ベンガラ)

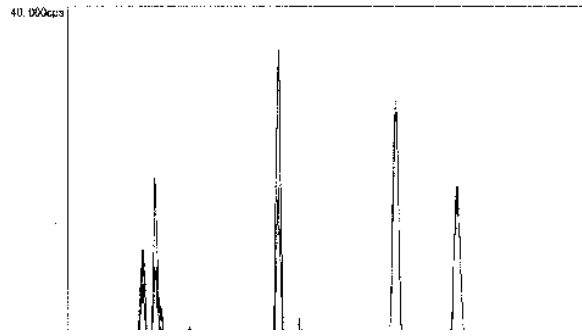
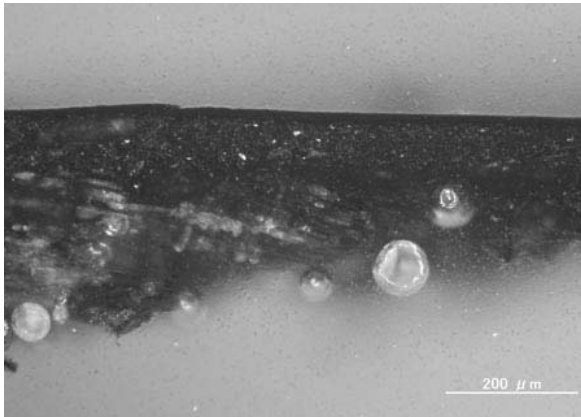
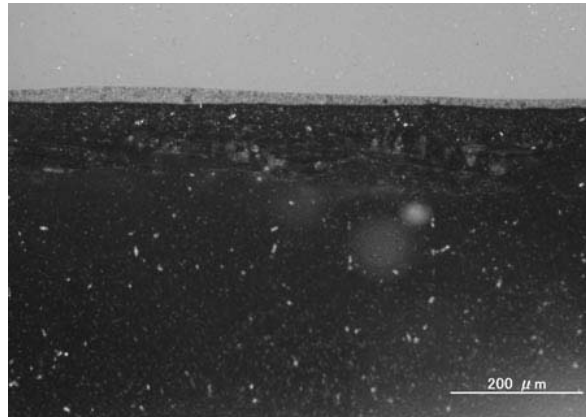


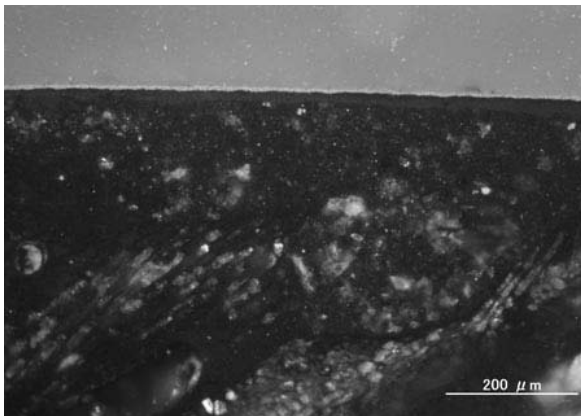
図 33 赤色系漆の蛍光X線分析結果 (2:朱+ベンガラ)



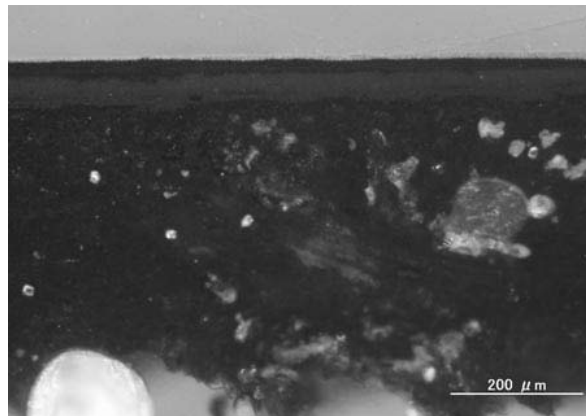
1 [炭粉下地+黒色系漆]



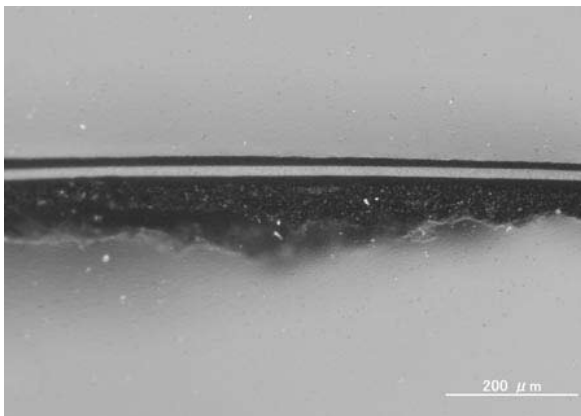
2 [炭粉下地+朱漆]



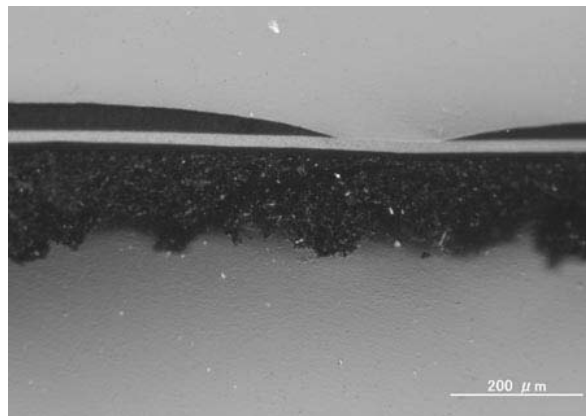
3 [サビ下地+赤褐色系漆+朱漆]



4 [布着せ補強+サビ下地+赤褐色系漆+朱漆]



5 [炭粉下地+朱漆+黒色漆 (加飾)]



6 [炭粉下地+朱漆+黒色漆 (加飾)]

図 34 漆塗り断面構造の観察 (落射顕微鏡写真)

付表1 掲載土器一覧表

番号	器種・器形	遺構名	口径	器高	底径	器表色調	断面色調	残存	備考
1	土師器皿Nr	SD115第1層・2層	6.1	1.5		にぶい黄橙色		75%	油煙、粗製
2	土師器皿Nr	SD115第1層・2層	6.8	1.2		にぶい黄橙色		25%	粗製
3	土師器皿Sh	SD115第1層・2層	6.2	1.5		にぶい黄橙色		50%	
4	土師器皿Sh	SD115第1層・2層	6.5	1.5		にぶい橙色		完存	
5	土師器皿Sh	SD115第1層・2層	6.9	1.6		灰黄色		75%	
6	土師器皿Sb	SD115第1層・2層	8.6	1.8		灰白色		33%	
7	土師器皿Sb	SD115第1層・2層	8.8	1.7		灰白色		50%	底部に黒斑あり
8	土師器皿Sb	SD115第1層・2層	8.9	2.1		灰黄色		完存	直線的で器高が高い
9	土師器皿Sb	SD115第1層・2層	9.0	1.9		灰黄色		75%	油煙
10	土師器皿Sb	SD115第1層・2層	9.0	1.9		灰白色		33%	
11	土師器皿Sb	SD115第1層・2層	9.2	2.0		灰白色		75%	
12	土師器皿Sb	SD115第1層・2層	9.3	1.6		灰白色		50%	
13	土師器皿S(小)	SD115第1層・2層	9.1	1.8		灰白色		50%	
14	土師器皿S(小)	SD115第1層・2層	9.1	1.9		灰白色		50%	
15	土師器皿S(中)	SD115第1層・2層	10.6	2.1		灰白色		75%	
16	土師器皿S(中)	SD115第1層・2層	10.7	1.7		灰白色		50%	
17	土師器皿S(中)	SD115第1層・2層	10.8	1.9		灰黄色		75%	
18	土師器皿S(中)	SD115第1層・2層	11.0	1.7		灰白色		75%	
19	土師器皿S(大)	SD115第1層・2層	12.6	1.7		灰白色		33%	
20	土師器皿S(大)	SD115第1層・2層	13.0	2.0		灰白色		50%	
21	瓦器香炉	SD115第1層・2層	6.7	4.8		にぶい橙色		90%	脚部付き
22	瓦器香炉	SD115第1層・2層	12.2	9.0		淡赤橙色		70%	脚部付き、3段に渦巻文
23	瓦器鍋	SD115第1層・2層	28.8			黄灰色		25%	残存高8.5cm
24	焼締陶器擂鉢	SD115第1層・2層	29.0	13.7		橙色		33%	丹波産 擂り目4〜5本単位
25	焼締陶器擂鉢	SD115第1層・2層	29.6	11.3		暗褐色		60%	備前産 擂り目6〜7本単位
26	焼締陶器擂鉢	SD115第1層・2層				灰褐色		破片	備前産 残存高6.9cm
27	古瀬戸灰釉皿	SD115第1層・2層	9.4	2.9	5.0	釉-オリーブ黄色	胎土-灰黄色	25%	
28	輸入白磁皿	SD115第1層・2層	10.0	2.9	3.8	釉-灰黄色	胎土-灰白色	25%	
29	輸入白磁皿	SD115第1層・2層	13.2	4.0	5.6	釉-灰白色	胎土-灰白色	33%	
30	輸入白磁皿	SD115第1層・2層	15.4	3.3	8.8	釉-灰白色	胎土-灰白色	25%	
31	土師器皿Nr	SD115第3層	6.1	1.4		にぶい黄橙色		50%	油煙
32	土師器皿Nr	SD115第3層	6.6	1.5		にぶい黄橙色		66%	
33	土師器皿Nr	SD115第3層	6.6	1.7		灰白色		33%	
34	土師器皿N(小)	SD115第3層	7.2	2.1		灰白色		33%	
35	土師器皿N(小)	SD115第3層・落ち込み層	7.3	1.9		灰白色		66%	
36	土師器皿N(小)	SD115第3層	8.3	1.9		灰白色		40%	
37	土師器皿Sh	SD115第3層・落ち込み層	6.6	1.5		灰白色		完存	
38	土師器皿Sh	SD115第3層・落ち込み層	6.9	1.6		黄橙色		75%	
39	土師器皿Sh	SD115第3層	7.2	1.5		灰白色		完存	
40	土師器皿Sh	SD115第3層・落ち込み層	7.1	1.7		灰白色		完存	
41	土師器皿Sb	SD115第3層	8.1	1.5		灰白色		33%	
42	土師器皿Sb	SD115第3層	8.3	1.6		灰白色		25%	
43	土師器皿Sb	SD115第3層	8.5	1.7		灰白色		60%	墨痕跡あり
44	土師器皿Sb	SD115第3層	8.5	1.8		浅黄色		90%	油煙
45	土師器皿Sb	SD115第3層	8.6	1.5		灰白色		完存	油煙
46	土師器皿Sb	SD115第3層	8.6	1.8		淡黄色		完存	油煙
47	土師器皿Sb	SD115第3層・落ち込み層	8.7	1.8		灰白色		33%	
48	土師器皿Sb	SD115第3層	8.7	1.8		灰白色		完存	
49	土師器皿Sb	SD115第3層	8.8	1.6		灰白色		完存	
50	土師器皿Sb	SD115第3層	8.8	1.8		灰白色		90%	
51	土師器皿Sb	SD115第3層・落ち込み層	8.8	1.8		灰白色		完存	油煙
52	土師器皿Sb	SD115第3層	8.8	1.8		灰白色		完存	
53	土師器皿Sb	SD115第3層	8.8	1.9		灰白色		60%	油煙
54	土師器皿Sb	SD115第3層	8.9	1.6		灰白色		60%	
55	土師器皿Sb	SD115第3層・落ち込み層	8.9	1.7		灰白色		完存	
56	土師器皿Sb	SD115第3層・落ち込み層	8.9	1.8		灰白色		90%	
57	土師器皿Sb	SD115第3層・落ち込み層	9.0	2.0		灰白色		60%	
58	土師器皿Sb	SD115第3層・落ち込み層	9.3	1.7		灰白色		80%	
59	土師器皿S(小)	SD115第3層・落ち込み層	10.1	1.7		灰白色		33%	
60	土師器皿S(中)	SD115第3層	11.2	2.0		にぶい黄橙色		25%	

番号	器種・器形	遺構名	口径	器高	底径	器表色調	断面色調	残存	備考
61	土師器ⅢS(中)	SD115第3層・落ち込み層	11.5	2.0		浅黄橙色		25%	
62	土師器ⅢS(中)	SD115第3層	11.7	2.3		浅黄橙色		25%	
63	土師器ⅢS(中)	SD115第3層	11.5	2.3		灰白色		完存	
64	土師器ⅢS(中)	SD115第3層	11.9	2.1		浅黄橙色		60%	
65	土師器ⅢS(中)	SD115第3層	12.0	1.9		灰白色		40%	
66	土師器ⅢS(大)	SD115第3層・落ち込み層	12.8	1.9		灰白色		25%	
67	土師器ⅢS(大)	SD115第3層	13.5	2.1		灰白色		33%	
68	土師器ⅢS(大)	SD115第3層・落ち込み層	13.7	2.1		灰白色		33%	
69	土師器ⅢS(大)	SD115第3層・落ち込み層	13.8	2.0		灰白色		25%	
70	土師器ⅢS(大)	SD115第3層・落ち込み層	13.8	2.2		灰白色		25%	
71	土師器ⅢS(大)	SD115第3層	14.5	1.5		灰白・浅黄橙色		33%	
72	土師器ⅢS(大)	SD115第3層・落ち込み層	14.5	2.4		浅黄橙色		66%	
73	土師器ⅢS(大)	SD115第3層・落ち込み層	15.5	2.5		灰白色		33%	墨痕跡あり
74	瓦器羽釜	SD115第3層・落ち込み層	20.2	9.3		黒褐色	灰白色	20%	
75	瓦器羽釜	SD115第3層・落ち込み層	24.8			暗灰色	にぶい黄橙色	13%	残存高10.5cm
76	瓦器羽釜	SD115第3層・落ち込み層	25.8			灰黄色	にぶい黄橙色	13%	残存高8.4cm
77	瓦器羽釜	SD115第3層・落ち込み層				暗灰色	黄灰色	破片	残存高6.7cm
78	瓦器鍋	SD115第3層	28.3			黄灰色	黄灰色	10%	残存高6.7cm
79	焼締陶器搦鉢	SD115第3層・落ち込み層	31.0			にぶい黄橙色	灰黄色	17%	信楽産 残存高11.3cm
80	焼締陶器搦鉢	SD115第3層				灰白色		破片	信楽産 残存高8.0cm
81	焼締陶器甕	SD115第3層・落ち込み層				暗赤灰色		破片	常滑産 残存高8.3cm
82	輸入白磁椀	SD115第3層・落ち込み層	9.0			灰白色	灰白色	20%	残存高3.1cm
83	輸入白磁椀	SD115第3層・落ち込み層			3.4	灰白色	灰白色	33%	
84	輸入白磁椀	SD115第3層・落ち込み層	8.4	3.3	3.7	灰白色	灰白色	45%	龍泉窯 面取りあり
85	輸入青磁椀	SD115第3層・落ち込み層	12.6	3.3	5.9	オリーブ灰色	灰白色	40%	龍泉窯 見込み釉ハギ
86	輸入青磁椀	SD115第3層・落ち込み層				緑灰色	灰白色	破片	龍泉窯 細描蓮弁文
87	土師器ⅢSb	SK130	8.4	1.8		浅黄橙色		60%	
88	土師器ⅢSb	SK130	8.8	1.7		灰白色		80%	
89	土師器ⅢSh	SD119	6.7	1.6		にぶい橙色		75%	
90	土師器ⅢSh	SD119	6.8	1.5		にぶい橙色		33%	
91	土師器ⅢSh	SD119	7.2	1.7		にぶい橙色		75%	
92	土師器ⅢSb	SD119	8.2	1.8		にぶい橙色		25%	
93	土師器ⅢSb	SD119	8.2	1.8		浅黄色		50%	
94	土師器ⅢSb	SD119	8.4	1.8		にぶい黄橙色		25%	
95	土師器ⅢS(中)	SD119	10.3	2.4		灰黄色		50%	
96	土師器ⅢS(大)	SD119	11.0	2.0		灰黄色		25%	
97	土師器ⅢS(大)	SD119	11.8	2.4		にぶい黄橙色		75%	
98	土師器ⅢS(大)	SD119	14.4	2.4		にぶい橙色		50%	
99	瓦器羽釜	SD119	21.6			黄灰色		13%	残存高4.8cm
100	瓦器羽釜	SD119				浅黄色		破片	残存高4.5cm
101	瓦器羽釜	SD119				灰色		破片	残存高5.5cm
102	瓦器羽釜	SD119	39.0			灰色		13%	残存高8.8cm
103	瓦器羽釜	SD119	19.0	9.4		灰白色		40%	

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょういちぼうじゅうに・じゅうさんちょうあと							
書名	平安京左京四条一坊十二・十三町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-33							
編著者名	大立目 一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 しじょういちぼうじゅうに 四条一坊十二 ・じゅうさんちょうあと ・十三町跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 みぶぼうじょうちょう 壬生坊城町 5-12	26100		35度 00分 14秒	135度 44分 51秒	2007年2月 1日～2007 年3月20日	315㎡	ホテル 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 四条一坊十二 ・十三町跡	都城跡	平安時代	流路、湿地状堆積	土師器、黒色土器、須 恵器、緑釉陶器、灰釉 陶器、輸入陶磁器、軒 丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、 丸瓦、平瓦、銭貨				
		鎌倉時代		土師器、須恵器、瓦器、 焼締陶器、輸入陶磁器、 軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、 丸瓦、平瓦				
		室町時代	堀、溝、Pit、土壙	土師器、瓦器、焼締陶 器、国産陶器、輸入陶 磁器、軒丸瓦、軒平瓦、 飾瓦、丸瓦、平瓦、漆 器類、木製品、銭貨、 金属製品、石製品、土 製品、人骨、獣骨				
		江戸時代	土壙、溝	国産陶磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-33
平安京左京四条一坊十二・十三町跡

発行日 2007年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961